

インフィニット・ストラトス ～一人の転生者～

モノアイの駄戦士

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

突如、異世界に飛ばされた二十九歳のガンオタおっさん。

その世界にはガンダムはなく、そして何故かISを持っていた！

異世界転移ものです。

目次

キャラクター解説	1
始動	4
0章 赤い彗星	
ソレスタルビーイングと少女	8
織斑マドカと天照戦人	13
INFINITE・STRATOS	19
第一章 IS学園	
再始動、IS学園!	26
代表候補生とバトル	32
ソロモンの悪魔	39
あわだたしい日常	44
過去の因縁	47
先生と生徒の試合	54
強襲	58
クラス代表戦	61
おや、シャルロット・デュノアの様子が……	67
水着に生徒会長	72
フルアーマーの魅力	77
第二章 真夏の海で嵐は起こる	
ようこそ!MS水泳部へ!	81
嵐が近づく	84
戦いは二手三手、先を読んで戦うもの	88
お家に帰るまでが校外学習……デスッ!	93

第三章 楽しい運動会と夏休み

生徒会長は運動会を仕切る合間に世界の暗殺部をオーバーキルする

焼き肉パーティー ヨーロッパ編 102

焼き肉パーティー アフリカ・南アメリカ・北アメリカ編 107

体育祭、開幕! 111

京都旅行……(ハ、一一一) 115

虹の彼方からやって来た男 122

第四章 呼ばれた男

俺! 参上! 125

大地の復讐鬼は空を駆ける 132

女権委員会の強襲 137

START SORTING 144

大地の復讐鬼VSガンダム&Gセルフ 147

織斑一夏&篠ノ之箒VSガンダムエピオン&ZZガンダム 152

ラウラ・ボーデウィツヒ&シャルロット・デュノアVSジ・O&ハ 157

イペリオンガンダム 157

セシリア・オルコット&凰鈴音VSアカツキガンダム&モンテール 161

マドカ&織斑千冬VSシナンジュ&ガンダム・バエル 164

あの成層圏にいつか届いて 168

キャラクター解説

天照戦人 アマテラス・セント 男性

第一章開始時点の情報

年齢25歳（前世は29歳） 使用IS／機動

職業／フリーター（無職） ↓IS学園の学生

ひよんな事故でIS学園に入ることになった今作のオリ主。原因は一夏。

彼もまた、世界で唯一ISを動かせる男性。

しかし、その裏の経歴は凄まじく、経験値的にはアムロ（逆シャア）の状態な感じ。

言うてなれば、歴戦でベテランで最強。

白騎士事件で当時の織斑千冬と戦い、ニュータイプ的能力もあつて一応勝ちになっている。

だが去り際に彼を見た者たちは、赤い彗星と異名をつけた。

ブリュンヒルデの二つ名を持つ千冬と同じ様な立ち位置である（二つ名に関しては）。

差別的なやつや殺しを楽しむやつらは粛清対象と決めており、特に殺しを快楽にするやつは二度と戦えなくなるほどトラウマや精神を追い詰められる。

ちなみに、その被害を受けた被害者はファントムタスク含めて約千人は下らない。

そんなわけで赤い彗星を怒らせるとか、色々と噂が止まらない。

日本人なのに、何故か頭髪の色は灰色で原作開始の一年ほど前に爆発事件で大怪我を負って主に右半身が凄まじい傷跡が残っている。

使用可能な形態

サザビー、ナイチンゲール、νガンダム、Hi-νガンダム、ユニコーンガンダム、シナンジュ（ネオ・ジオング）、ギラ・ズール、ギラ・ドーガ、リ・ガズイ、リ・ガズイカスタム、ZⅡ（ゼツツー）、Ξガンダム（クスイーガンダム）、ペーペロネー、クシャトリヤ、バンシイ（バ

ンシィ・ノルン)、ガンダムバルバトス(R・R R)、ガンダムバエル、ザクⅢ、ジエガン(D型)、リゼル、ガンダムサンドロック(改)

織斑マドカ オリムラ・マドカ 女性

年齢16歳 使用IS / ???

職業 / IS学園学生

原作では一夏とは敵対する関係だったが、フアントムタスクを崩壊させた戦人によって拾われて時間がたつと共に性格が軟化。

自分にも相手にも厳しいが、夫(予定)である戦人に対してはとも甘えるような性格になっている。だが、まだ爆発事件での事を引きずっている。

千冬らに気づかれぬように、髪を伸ばしたり気配や雰囲気を変えたので(どうやってか)多分気づかれない。

尚、一夏に対しての復讐心などは全くない。

メインヒロイン。

織斑一夏 オリムラ・イチカ 男性

年齢16歳 使用IS / 白式

職業 / IS学園学生

原作主人公。

恋愛に関しては超鈍感の朴念仁のアホ。

しかし、仲間思いで信念を貫き通す性格を持っているため、完全なバカではない(バカとはなんだ! by 一夏)

原作とはあまり変わらないが、マドカと敵対することはない。

本人は自覚していないが、シスコン。

織斑千冬 オリムラ・チフユ 女性

年齢24歳 使用IS / 白騎士↓暮桜

職業 / IS学園教師

紆余曲折あってIS学園の教師を勤める、IS操縦士最強の女性。

異名にブリュンヒルデがつけられているが、本人は嫌がっている。
こちらも原作とはあまり変わらず、せいぜいマドカの事を気になっ
ている様子程度。

白騎士事件で、赤い彗星とミサイル迎撃後に戦闘を開始し、逃げら
れたため戦略的には負けといえる。

そのため、今度会ったときはその素顔と手合わせをしたいようだ。
まあ、すぐそこに本人がいるのだが。

意外とブラコン。

篠ノ之箒 シノノノ・ホウキ 女性

年齢16歳 使用IS／打鉄（量産型）

職業／IS学園学生

普通に合格ルートを通った、篠ノ之束の妹。

原作と変わらず、幼馴染の一夏が好き。

姉の束は嫌っており、そのため名字で呼ばれる事を嫌う。

セシリア・オルコット 女性

年齢16歳 使用IS／ブルーティアーズ

職業／IS学園学生、（オルコット社次期社長）

イギリスの代表候補生。

性格も原作と変わらず、自信満々の専用機持ち。

まだブルーティアーズを扱いきれていないが、成長の度合いを考え
ればまだまだ。

過去に赤い彗星が、両親の遺品を持ってきた事から興味を持ってお
り、正体を探っている。

始動

いつの間にか俺は、どこぞと知れぬ町に近い林の中に立っていた。状況がわからない。

さつきまで俺は、公式のコンテストに出品するために徹夜してガンブラを作って塗装やその他もろもろをしていたのだが、いつの間にか寝てしまっていた…

と思っていたのだが、全く違って何故か眠る直前にポーズをとらせていたサザビーの姿をしているのである。

状況がよくわからないので、色々と触ってみたり木を殴ってみたりした。

触っても金属の装甲に触れるだけで、殴ったら木が殴った所が粉碎して倒れた。

そして、なんか目の前に飛翔物体があるんですが。

ミサイルっぽい。

ついさつき、何となく使い方がわかってきたので、サザビーのメイン兵装である、ビームショットライフルを出現させる。

ロックオン。

撃つたらちゃんとビームが出て、ミサイルが爆発した。

ちなみに、IS備え付けの電子説明書を見ていたら、色々すごい物らしく、そして原作では飛べないモビルスーツが飛べるので、嬉しいですなあ。

どうやら、たくさんミサイルが発射されてこの町に着弾しようとしているらしい。

で、そこに白いIS。

剣だけでミサイルを迎撃しているが、そんな剣一本ではいずれ落としきれなくなる。

というわけで、俺も参戦することにした。

「天照戦人、サザビーで出る！」

ちなみに、名前に関して文句や哀れみ等は不要。

俺だって名字がこんなんだっていうのは罰当たりな感じでやだよ

!

戦人なんて、元ネタが某有名なヒーローさんから取ってるんだよ!?
というのは置いて、さっさと助けますか。

「助太刀するー!」

ビームショットライフルを、とにかくミサイルに当てる。

そして、腹部の拡散メガ粒子砲をぶっぱなして、次々とミサイルを
落としていく。

そういえば、ファンネル使ってみよう。

あつたし。

だが、使えるか……だなあ。

「ファンネル……!」

あつ、展開した。

マジか!?

そして、俺は直感とイメージでファンネルに指示を出す。

「行けーファンネル!」

ファンネルが、飛んでいく。

そして、ビームが撃たれてミサイルをドンドン落としていく。

妨害がないのが幸いして、俺は安心してファンネルの扱い方の感覚
を覚えられる。

―篠ノ之束 side 1―

「な、なんで……!」

束は、突然乱入してきた赤いISを見て、驚愕した。

ISの開発者、篠ノ之束は何を思ったかひとつの町に世界中のミサ
イルを撃たせて、ISの輝かしいデビューを果たそうとする計画だっ
たのだが…

「あんなIS、私の造ったものにも、知っているものでもない!」
思わず叫んでしまうほど、予想外の事であった。

突如出現した赤いISは、織斑千冬の操るISと共にミサイルを迎
撃している。

未知の存在は、篠ノ之束という人間の形を持った【天災】を苛立た

せ、邪魔でしかなかった。

「ちーちゃん、アイツを殺してね」

l o u t s i d e

何故か発現したニュータイプ能力の直感で剣撃を避けながら、俺は考えていた。

急に攻撃してくるもんだから、慌てたなあ。

酷いもんだ。別に敵対したわけでもないのに。

あつ、でも俺の存在は色々と邪魔になるよな。

だって、まだこの世界にはISが量産されていないっぽいし。

つーか、俺のISは無駄に便利だ。

録画・撮影・インターネット・音楽……娯楽もある。

しかもゲームまでできるのだから、もう、万々歳である。

「なんで攻撃するのぉ!?!」

今のは危なかった。

剣が紙一重のところを通る。

「……………」

相手は沈黙と剣で返してきた。

うん。殺すつもりだ、コレ。

「ファンネル!」

オールレンジ攻撃を仕掛けるが、最低限にダメージを抑えながら回避する。

反応速度や、勘の良さが良いね。

白いISは、剣のみなのに強い。

だが、剣だけでは敵は倒せないことを俺はあの作品で知っている。「剣で攻撃なんてチマチマとしたものだねえ! 剣だけじゃ、救えるもんも救えないぜ!」

ちなみに、俺の声はジャミングが、入っっていてまだに解除の仕方がわからない。

今回はできなくて良かったが。

「いい加減、決着を着ける!」

「……………」

俺は、ファンネルを展開し、プロペラントタンクを外す。

その行動に、相手は疑問符を頭に浮かべながらファンネルを落とすていく。

その間に俺は手に持ったプロペラントタンクを白いISの前に投げて、ビームショットライフルで爆破する。

「くうっ!？」

女の呻き声が、聞こえたがこの場にいると生死に関わるのでさっさと退散する。

「ちっ。逃がしたか…」

俺は一方的に状況を押し付けられながら、この世界を生きることになった。

とても迷惑です。

0章 赤い彗星 ソレスタルビーイングと少女

あれから半年。

白騎士事件と呼ばれた、ミサイル迎撃の時から一年ほどたった。

俺は、あのあと世界各国を旅してYouTubeなるもので生計を立てていた。

題材はもちろんガンダム。

無駄に便利なISもあって、それなりのペースで配信し、チャンネル登録数が着実に増えていった。

リアルロボット系アニメの真髄である、ガンダムがこの世界にないのは悲しいが、だからといってなにもしないのはダメだ。

というわけで、YouTubeで自作のガンプラでコマ撮りをしてアップしている。

ちなみに、俺は赤い彗星と呼ばれていた。

何故なら、赤き彗星のようにその場を去ったから、とからしい。

そんなんで、シヤア大佐の異名を名付けないで。

不敬罪で殺される。

YouTubeでは、原作と同じストーリーをガンプラで再現し、3Dも混ぜ合わせて作った。

前世でプログラマーとか、マッサージ師とか色々やってよかった。

なので、人気になるほどお金が懐に入ってきて、最終的には日本円で一億超えた。

やべえ。

あんまりお金を使わなかったのもあるが、貯まりすぎだろ。

我ながらありえないとしかいいようがない。

そんなんだがら、テレビ出演とかも果たしてしまった。

まあ、時の人だな。

で、現在はソレスタルビーイングの真似事をここアラビアとかでや

「アウト!?」 「アツっ……!?!」

十人十色の反応で、それぞれ気絶したりなんとか痛みには堪えたりと、たくましい女性たちだが、殺しを平然で笑ってやるやつはどうであろうとぶっ殺す。

その夜、寒い砂漠で多数の女性の悲鳴が遠くから聞こえたというオカルトチックな噂が流れたらしい。

ちなみに、彼女たちは生きているが精神をズタズタにしたので再起はほぼ無理だろう。

ザマア（ドヤア）

ー半年後

さすがに疲れた。

YouTubeにガンダムの動画をあげながら、ソレスタルビーイングやってたら半年ぐらいでもう疲労感が半端ない。

まあ、自分でやり始めたのだからやるしかないし、それぐらいしか、一日の半分を過ごせんし。

それと、サザビーからナイチンゲール、シナンジュになれるようになった。

そのおかげで、最近は汎用性の高いシナンジュを多用している。

格好いいよね。シナンジュ。

現在は、テロリスト…というより亡国機業と戦ってる。

む：カタカナの方がカッコいいからそっちにするか。

フアントムタスクだっけ。

とにかく、そいつらを殲滅してる。

もちろん相手も黙ってやられているわけがなく、攻撃してくるが、冴えに冴えわたった俺の何故か発現したニュータイプの直感がほとんどの攻撃を避けた。

まあ、イギリスとかアメリカから丸ごと攻撃をくらうこともあった

が、その際はその国の人達が非難を浴びせてたもんだから面白いわけ
で。

色々行った先々の国の犯罪とか人助けとか、そんなこともしてた
からそりゃヒーローとか英雄視されるわな。

ある日、フロントムタスクの根城を襲撃したのだが（その時は根城
とか知らなかったけど）その際、一人の少女を拾った。

顔は、現在ISの操縦士として最強を誇る織斑千冬にかなり似てい
る。

とりあえず、自分の拠点に連れ帰ったのだが……

「離せっーこのー!」

逃げ出そうとするし、攻撃してくるし好戦的である。

「離せねえよ。そんなだと野垂れ死ぬぞ?」

「……チツ」

さすがにそれぐらいの知能はあるのか、反抗をやめた。

国際ニュースを見ると、なんかフロントムタスクが壊滅して主要メ
ンバーのほとんどが逮捕され、トラウマを植え付けられた状態だとい
う。

まあ、俺がそうしたから当たり前か。

ちなみに、どうやってやったかは企業秘密である。

とりあえず、精神的に追い詰めたとだけ言っておこう。

彼女の名前は織斑マドカ。

織斑計画なんていうやつなんかその中心に位置するらしいが
……まあ、いいや。

「どーする? フロントムタスクは壊滅。で、お前には行くところも宛
もない、復讐に燃えるおバカ」

「バカじゃない!」

「失敗作とかそんなんで復讐に燃えるやつは、バカだよ。復讐を果た
したら、お前はその後どうするんだ?」

と、聞いてみたら黙り込むマドカ。

俺は続けて言う。

「…俺についてくるか？」

「行くかつ！」

「復讐よりは全然いいと思うけど。それともここで死ぬか？」

「……………」

まあ、こんな押し問答が半日くらい続いたのだが、結局マドカが折れてついてくることになった。

彼女とは長い付き合いになりそうだ。

織斑マドカと天照戦人

あの日から、色々であった。

マドカとの距離は、少しずつ縮まっていった。

まあ、結構疲れたけどね。

―中国―

18歳になった俺は、9歳になったマドカと中国にやって来た。

バイトもこなしながら、絶景やら珍百景やらをみたり、色々楽しんでんだ。

でもまあ、なんでか組織を壊滅させられたフロントムタスクの残党が、つけ狙ってきて事件を起こすわ、思わず笑ってしまう間抜けをやるわで大騒ぎである。

「マドカ、今日からお前は月読マドカな」

中国をそろそろ出ようかと、考えていたときに俺はマドカにそう言った。

「何故だ？今さら名前を変えるなどと、どう言うことだ？」

「いやあ、織斑なんて千冬かお前の言う一夏ぐらいだろ？偽名はなんであれ、必要だよ」

と、言ったら納得した様子で「うむ」と了承した。

そこにいるだけで、事件に巻き込まれるのだから俺としてはさっさと残党を消したいが、なにせ情報が少ない。

こちらからはどうしようもないので、とりあえず次はイギリスに行くつもりだ。

ちなみに、シナンジュをネオ・ジオングにすることを可能になったが、稼働時間がまだ可能になったばかりからか10分と短いため、今は使わない。

それ以外だと、ルガンダム、リ・ガズイ、リ・ガズイカスタム、HⅡルガンダム、ユニコーンガンダム、シナンジュ・スタイン、ナラティブガンダムが使用可能になった。

かなり増えたが、正直メディアにもこの情報はある程度知られてるし、ユニコーンガンダムに関しては基本的には…いや、余程の事がな

い限りは絶対に使わない。

ユニコーンは、まだ出すのは早い。

ーイギリスー

そろそろ別の国へ行くこうかと思っていたのだが、乗っていた列車が爆発事故を起こして、車体が転倒。

俺はとっさにI Sを展開して、倒れかけた車体をゆっくり下ろしたが、それでも至近距離で爆発に巻き込まれた人はもう助かりようもないほどに傷が酷かった。

その内の夫婦が、息絶えそうながら俺に話しかけてきた。

「君は、赤い彗星だね…?」

「……そうです」

まあ、この赤い装甲を見りゃ何となくわかるよな。

「私たちの娘に、これを渡してくれないか?もう私たちはもうじき死んでしまう。せめてこの娘の思い出の時計を……ゴハアツ!」

吐血する、男性。

「お願いします。娘にもらった大切な時計なんです…」

もはや動くこともできない女性。

「……わかりました。貴方の名前は?」

「ーゴフツ…オルコツトだ…!」

名前は聞き取れなかったが、とりあえず名字だけでもわかったのは幸先がいい。

「わかりました。この時計を貴方たちの娘さんに渡します」

「あり……がと、う…」

父である彼は、そう言っただけで事切れた。

彼女の母であろう女性は、すでに事切れて物を言わない、冷たい人だったものになっていた。

それを少し離れた場所で見ているマドカは、少し面倒な顔をしながら、俺に話しかける。

「本当にやるのか?」

黒ベースの服装に、この年の少女としては早い体の成長が始まって

いるマドカは、実に面倒な顔をしていた。

大事なので、二回言いました。

「さすがにこれで約束破るやつは、悪人かバカか、鳥頭の人だけだよ」
そう言っつて、俺はマドカを担いでその場から離れた。

ネット情報も使っつて、目的地に着くと俺はマドカ服についている
フードを被せて、中に入る。

「何者だー！」

メイドさんたちが臨戦態勢になる。

まあ、ISだから勝ち目はないと思いつつ、だが。

「待っつてくれ。君達の旦那さんたちについて話したい事がある」
「!？」

メイドさんたちが、驚愕の目で見てくる。

「まさか……!？」

「そのまさかだよ。持っつて帰れたのはこれさ」

時計を取り出して、メイドの一人に渡す。

「冥福を祈る」

そして、俺はマドカをまた担いで次の国に行くことにした。

ドイツー

何やら騒がしい。

と、思っつて日課の筋トレを中断し、野次馬の中を切り抜けると、軍事基地だろう柵の向こうで、ドイツのISと正体不明のISが戦っつて
いた。

御年21歳になつた俺と、12歳になつたマドカ。

マドカは、最近は年相応の笑顔をよく見せるようになった。

まあ、俺が見るとすぐに真顔に戻るのだが。

俺とはいうと、YouTubeで配信しているガンダムの動画がす
ごく人気で、もうファンクラブなんてできてる。

初代、Z、ZZ、Gガンダム、F91を完結させて、今はWとXを
交互に配信している。

いやあ、この世界にもガンダムファンができて嬉しい。

チャンネル登録者数も、百万を越えた。

改めてすげえ。

で、話を戻すと、正体不明機とドイツ機が戦闘を繰り広げており、ドイツ側が襲われているようだ。

だがよくみたら、正体不明機がフロントムタスクのロゴを消えかかっていたが入れていた。

というわけで、ISを纏う。

もちろん、誰もいない人気のない所で。

本来、女性にしか使えないISは、男の俺にも使えるなっている……というか使えるISなんだよな、俺のは。

だが、正直ISは兵器としては完璧とは言えない。

まだ適正とかだったらまだしも、女性のみという制限は、他の兵器と比べたら劣る。

女性は基本的に、戦いを経験していないし、素人を乗せたら尚更兵器としての性能が下がる。

とっさの判断、行動力、大胆さが性格によって極度に左右されやすい。

別に俺は男尊女卑ではないが、客観的に、そして個人的に見ても、ISは兵器としては性能が良いだけの普及の必要がない兵器だ。

モバイルスーツのザクも、元は宇宙用のパワードスーツというプロパカンダで開発され、兵器転用されたが、あちらは18メートルという大きさを持ちながらも、誰もが訓練を受ければある程度動かし、戦うことができる。

攻撃力や防御力的には、ISに劣るが兵器としては完成されたものだ。

正直、篠ノ之束は天才かもしれないが、同時に天災で何かを開発する資格はない。

俺はそう思う。

と、そんな風に感慨深くしながら、フロントムタスク残党のISを

圧倒する。

使用しているのはシナンジュ。

ちなみに声は池田秀一さんになっている。

どうせなら楽しみたい。この機能。

「さっさと墜ちてくれたまえ！」

「ちいっ！」

「……！」

激しく、ISの近接ブレードとビームサーベルとビームソードアツクスがうち合う。

「遅い！」

「があっ!？」

腹部に蹴りをいれて、倉庫に吹き飛ばす。

戦っていたドイツのISは、その戦いの中に入り込むことができなかった。

「ふう……」

よし、終わった！

ーフランスー

22歳と13歳の男女が、パリの町を練り歩く。

字だけだと、危ないやつだが戸籍上は義兄妹なので大丈夫だ。多分。

「マドカ、最近の良い顔してるな」

「そうか？ 私としてはあまりそんな感じはしないが……」

無自覚のようだ。

以前、俺がそれなりに金を持っていることを知ると、マドカは殺しに来たなあ。

俺のことを殺そうとナイフだったり、毒だったり、何処からか持ってきたガスまで使ってきて殺そうとしてきた。

まあ、もちろんそんなのに殺られるわけにはいかないの、要警戒とニュータイプの直感をフルに使ってた。

が、数年前からそんなことをしなくなった。

確か、俺が転移者であることや一人なことを教えた頃ぐらいだっけな？

だが、今はそれ以前にガンダムが世界中で大流行したので、作者である俺は握手やサインを求められて大変だ。

やっぱ少し変装をした方が良いだろうか？

まあ、人気になった理由として声入れたり、自作のガンプラだったり、高い技術力による加工とかで崇められたり色々でうれしい悲鳴だ。

最後列に並んでいただろう中性的な顔立ちの金髪美少女にサインを書いて終わりにする。

「疲れたあ……」

「……………」

とりあえず、少ししたら日本に帰ることにした。

にしても、筋トレで鍛えた体がすげえバキバキだ。

まあ、ISの使用に必要な経費ならやるしかないからなあ。

以前は鍛えなかったゆえに後悔して、筋トレ始めたのだ。

これからも続けるつもりだ。

この筋肉は、ガンダムキャラに例えるなら三日月みたいな感じか？
結構、割れてる。

一応、言っておくが細マッチョだぞ〜

INFINITE・STRATOS

俺とマドカは、日本に帰ってきた。

「ソロモンよ!」

「私は帰ってきた!」

あれ?

ま、マドカが…!?

「なんだ?何か悪いことでもしたか?」

マドカが極めて真面目な顔で言う。

「いやあ、なんか初めてノリに乗ったから驚いて」

「……………別に良いだろう?」

あれ?なんで顔を赤くしてんの!?

なんか泣きそうだぞ!?

パニクる俺。

それからしばらく、俺はバイトで生活費を稼ぎ、マドカに勉強を教える。

今その君。俺には大金があるから大丈夫だと思っただろ?

いくら億を越えていても、YouTubeでの収入が少なくなったら意味がない。

なので、アルバイトで貯金をいざというときに貯めているのである。

だから、基本的にバイトで稼いだ金で生活を送っている。

マドカはちゃんと勉強ができており、今では高校生の問題を少しならできるようになっていいる。

すげえな。

「マドカはどこに通う?」

ある日、俺はマドカに聞いてみた。

何やら高校の雑誌やら何やらを見ていたので。

「……………良いのか?」

「別に良いよ。それにこの社会で生きてくには高校だけでも通っておかないと」

まあ、小中行ってないけどな。

そこらへんは、偽造すれば良いか。

「私はISを扱う兵士として作られた。なら、IS学園に行くか」

「おいおい。そんな理由で良いのか？少なくとも、俺としては普通に過ごしてほしいけど」

「なら、戦人も高校に通うか？戦人も高校に行ってないだろ？」

うっ。

まあ、この世界では行ってはないが……

もうそろそろ24のおっさんだぜ？

「まあ、マドカがそこにいききたいなら良いぜ。でも、容姿を変えないとな」

「ん。そうだな。この顔では他の者には、似てるで通せるだろうが、千冬に対しては私が織斑計画の一人ということがわかるだろう」

「顔はそのままで、変えるなら髪型か」

「それが妥当か」

「とりあえず、これから高校に入るまで髪を伸ばし続けるか」

「その方が簡単でいいか」

「いいのか……」

他にも色を変えるのも良いと思ったが、綺麗な黒髪を見て、少し気が引けるので言わなかった。

マドカなら遠慮なくしそうだ。

「とりあえず、今日はシフトもないから外食行くか」

「おおおっー」

目をキラキラさせるマドカ。

もう、初めてあつた頃とは全然違う。

言葉遣いはアレだが、反応や感じ方は年相応の少女。

俺はマドカにとって父親か兄的存在だろう。

だから、そんな姿を見せてくれる。

可愛いやつめ。

そう思いながら、商店街にしてはそれなりに開けた道を歩いていた時だった。

予知が来た。

爆発で、俺とマドカが吹き飛んで死ぬところ。

「つつ!?マドカっ!」

「なあっ!?何を…!?!」

ドオオオオオオオーンツ!!

凄まじい閃光と爆煙。

俺は咄嗟に、マドカを突き飛ばし、俺は爆風を食らった。
体が痛い。

血がダラダラと体から出ていく。

「ぐっ…!」

「戦人!戦人おっ!?!」

マドカが、何か恐ろしい物を見たような目をしていた。

驚愕もそこにあっただが、一番は恐怖。

痛みで頭が回らない俺には、それを考える暇もなかったが。

「救急車呼べ!」

「やべえ!一人ヤバイぞ!」

「キヤアアアアー!!」

人それぞれの反応をしている一般ピープル。

俺は、マドカの手を握りながら意識を手放した。

結果から言うと、命は助かった。

後遺症も奇跡的になく、爆弾の威力をあげるために使われたろう釘や何かの破片も全て取り除かれて、無事生きている。

目覚めたとき、マドカが泣き疲れて寝ていた。

医師が言うには、俺の右半身を主に火傷や破片などによる傷で酷かったらしく、血もかなりの量が失われていた。

「とりあえず、傷や火傷は塞いだので、しばらく入院して療養に専念してください。今の状態だとすぐに傷が開きます」

ということ、病院でお世話になることになった。

一応、貯金はあるのでしばらくは生活に困らないが、それでも色々大変だ。

YouTubeのチャンネル登録してくださった方々には、爆発事件でしばらく療養することを伝え、しばらく配信をやめることにした。

そして、俺とマドカを爆殺しようとしていたのは、俺と同じようにオリジナルのSF系の動画や俺のガンダムを元に二次創作やオリジナルを書いていた人らしい。

前者はともかく、後者はネットユーザーの人達が悪い。まさかとにかく批判を食らわせるなんて。そりやこうなるわ。

ただ、爆弾に関してはフードを被った誰かに渡されたので、みんなで組み立ててやったらしい。

フロントムタスクの残党であろうか？

今度は、本格的に殲滅しようか？

マドカは、毎日やってきた。

病院は、数ヶ月程度で退院できるようなのでそこまで通うことはないのだが、家に一人でいてもつまらないらしい。

それに、何だか前よりも距離が近い。

まるで恋人の距離のように……！！

いやいや、それは不味いって！

来年か再来年辺りなら、法律で結婚可能なんだろうが、マドカが俺に好意を抱いている？

まさか……心当たりはあるが。

退院の前日、マドカがやって来た。

他愛ない話と、IS学園の受験に行くことが決まって喜んでいた。

それは良いことだ。

「良かったなあ。ISの適正はAなんだろう？」

「ああ。勉強の方面の受験は終わったので、あとはISによる試験だけだ」

「そうかそうか。でも念のため、俺もその日は行くぞ？」

「でも、傷は大丈夫なのか？」

「大丈夫だつて」

しかし、まだマドカの顔は曇った感じだ。

「…あれはお前のせいじゃないよ。この傷だつて、俺としては名誉の負傷って感じだよ。マドカだけでも無事で良かったんだから」

「…っ!!」

なんだか、顔が赤くなりマドカがまた後ろを向く。
めっちゃ照れ屋だ。

「だ、だが戦人に傷を負わせたのは私だ」

「でも、こうでもしなきゃ俺達はある世だったよ」

「……………」

短くも長く感じる沈黙の時間。

そして、マドカが動いて俺を抱き締める。

「ちよ、え?」

急に抱き締められたのだから、俺は驚くしかなかった。

しかも、胸が…!

来年で16になるマドカは、よく食べたせい胸の発育が良くて、大きくなっている。

は、恥ずい。

「……………好きだ」

「へえー!?!」

急な告白に、奇妙な声をあげてしまう。

でも、こんなに驚くことが多いのですから勘弁して。

「こんな私じゃダメか?」

「ううっ!?!」

上目使いでこちらを見るマドカ。

ここまで性格が変わっていると、もはや恐怖でしかない。

「と、突然すぎて状況が追い付いていけない…………」

「…あ、愛してりゆんだっ!」

囁んだ。

今度は、後ろを向かず恥ずかしそうな顔を見せつけてくれる。

「あああ、もう!?!」

頭をかきむしる。

もう、ここまで言わせたんだから答えるしかねえ！

「わかった！慎んでお付き合いさせて頂きます！」

「！」

さらに抱き締めてくるマドカ。

プラス涙に胸が顔にめっちゃや来てる。

さすがに苦しい！

「ちよっ……！」

そのあと、酸欠で窒息した。

それから数ヶ月。

ついにIS学園の校門に来たマドカ。

そして、なんやかんやで家族になった俺は一応保護者的な感じでやってきた。

ちなみに、他の女子や通りすがりの男性たちには、俺の顔についている酷い傷跡にビビったり、目を背けたりと様々だったので、意外と精神的に来るところが……

「戦人、行ってくる」

「おう、頑張れよ。あ、でもトイレしたいからここのトイレ借りてくるわ」

苦笑いのマドカと別れ、トイレを探す。

これが、とんでもない学園生活の始まりとも知らず

第一章 IS学園 再始動、IS学園!

トイレを探していた俺は、近くにいた教師さんに聞いて用を済ませた。

ちなみに、俺の右の顔の数多の傷跡に驚いていた。

トイレを済ませたのはいいのだが、今度は帰り方がわからなくなってしまった。

意外とIS学園は広く、少し複雑で迷ってしまった。

「ん?」

俺は何故か倉庫にいた。

シーツが被せてあったので、引つ張り落とすと日本の量産型IS【打鉄】が置いていた。

そして、ちょうどその時に扉から一人の少年が現れる。

「すみません。ここにどこですか?」

「いや、俺に言われてもここ初めてだし、トイレ行って迷った残念な大人だし」

「そこで自虐いく!?!」

いいつつコミをするじゃないか、少年。

「うーん、マジで試験会場どこだ?」

「あー、つかお前は男なのになんでIS学園いるんだ?」

「えっ!?!」

「ん?」

どうやら、降りる駅を間違えたらしく一つ先の駅に降りてたらしい。

今からダツシユで行けば、本来の受験会場に行けるのだろうか……

「どうせIS触れるなら触りたいしなあ、いや触る!」

「子供か!あ、いや子供か」

「どっちなんだよ……」

まあ、俺も他のISを触ったことはないので触ってみて俺のと違い

があるか確認しようとした。

この好奇心が、俺の未来をある意味潰してしまった。

「うおっ!?!」

突然、ISが光って目の前から消える。

だが、すぐに目線の高さの違いに気づき俺は自分の体を見つめる。

「マジか!」

……装着できていた。

非常に不味い。

これでバレたら俺はここで……

「貴方たち!……ここで何を……えええ!?!」

フラグ回収されましたあああー!?!?!

「いやー、そのおー、なんかISが」

「勝手にー、な?」

少年と目を合わせる。

しかし、女性教師の方はすぐに自分より上の人に連絡をかけて、ここに留まるように言われた。

もう、ダメだ。

モウオシマイダツ!、(ㇿ、 ; ≡ ; ㇿ、)

「ここにISに乗った男がいると言われたので来たが………一夏?」

「千冬姉!?!」

「え? しら……あのIS大会の優勝者のヒルドルブ?」

「誰が戦の狼だ!」

「すみません」

ブリュンヒルド。

それが、織斑千冬の二つ名である。

まあ、過去の話ではあるが多分女性の中では最強のIS操縦士だろう。

「とりあえず、二人ともついてきてもらおう」

ISを外して、着いたのは誰もいない客人用の部屋。

そこで、俺達は織斑千冬にこう言われる。

「二人とも、IS学園に入るんだ」

「はあっ!？」

「ちよ…」

オーバリアクションなのは、一夏。

俺としては別に良いのだが、いい年したおっさんが学校に通うなんてシユールすぎるだろ。

しかも、俺の傷跡に見た人たちビビってるし。

「そういうば、お前の名前は？」

あ、そーいや名前を言っただけな。

「天照戦人。IS学園の件については、しょうがないから行きますよ」
ついでな感じで、IS学園に通うことを決める。

まあ、どちらかというに入った方が今の俺とマドカにとっては楽と
いうか、また襲撃を受けることは少ないと思われる。

「ちよ、何でだよ!？」

「あー、一夏だっけ？」

「ああ、そうだが？」

おい、裏切られたような顔するな。

「…得体の知れないマッドサイエンティストに捕まって、体をいじく
り回されて情緒不安定な強化人間にされたいか？」

「……まさかのガンダムネタ!？」

「まあ、戦人のいう通りだ」

結果的に一夏も入りました。

「ちなみに、天照さんはいくつなんですか？」

「ん？25歳だよ？あと戦人でいいよ」

「に、25……!」

ちなみに、一番衝撃を受けたのは千冬さんで。

「わ、若い……！私は24なのに三十路とか言われているのに……!」

今、さりげなく黒歴史を聞いてしまったような感じがして、俺と一夏は気不味い顔になった。

俺の顔は意外と童顔というか、若く見える事が発覚した。
家に帰ると、マドカが待ちくたびれていた。

「遅い！何やってたんだ！」

「すまん。あと、俺もIS学園入ることになった」

「……はあっ!?!」

まあ、当たり前前のリアクションだ。

一瞬固まって驚いたマドカの顔は可愛かった。

って、惚気けてる暇はない。

「まあ、とりあえず俺も寮に住むことにするわ。じゃねえとまた爆殺されかねないぜ」

「…まあ、私は学園でも一緒にいれるのが嬉しいが」

「おい、泣けること言ってくれんな！」

もうノロケルシカナイジャナイカ！

あれから甘える＋ラブラブになった俺達は、一週間ぐらいはとにかくやりまくっていた。

ちなみに、住んでいる人は独り身の爺ちゃん婆ちゃんが一人ずつ住んでいるボロアパートなので、あまり声をあげなければ…って何解説してんだよ！

とにかく、荷物は少ない方ので荷物をまとめておく。
すぐにでも引っ越しできるように。

学園登校初日。

とりあえず挨拶と軽い説明で終わった。

で、すぐに荷物を指定された部屋に置く。

ちなみに、幸か不幸かマドカとは同じ部屋に割り当てられた。

ただ、部屋の鍵をくれた山田先生は困惑していたが。

俺も困惑だ。

まあ、いいか。

次の日、本格的に授業が開始され、まずは自己紹介からとなった。

「お、織斑一夏です。よろしくお願いします」

……………

沈黙の時間。

「もつと何か趣味とか言え！」

バシン！

「いてえっ!?!」

織斑先生の出欠簿が、一夏のド頭に直撃。

一夏はあえなく轟沈する。

「何すんだ千冬姉!?!」

「ここでは織斑先生だ!」

バコン！

まともや出欠簿が。

さすがに一夏も心が折れそうだ。

「あ、あの、次は天照君ですよ?」

「ははは…年上なのに君づけか……」

そんなに若く見えるの…?」

すると、山田先生が慌てる。

「あああ!す、すみません!すみませんでした!だから闇のオーラみたいの出さないで!」

え？闇のオーラ!?

まあ……今は放っておこう。

「えーと、俺の名前は天照戦人。こう見えても25歳のおっさんだよ。特技は…動画作成か？」

『おおー!』

なんか驚かれた。

まあ、女子の大半が箱入りエリートさんたちなのである意味当たり前か？

にしてもブリュンヒルドの名前はすごいすな。

女子たちが黄色い悲鳴をあげている。

ちやうどチャイムがなり、10分ほどの休み時間。

そこに、複数名の女子が俺に寄ってくる。

「戦人さんって、本当に25歳!？」

「ああ。本当だ」

「おっさんというより、お兄さんの方があってるわ!」

「同感!」

「本当かよ……」

なんだろう。

この嬉しいようで嬉しくない光景は。

「その顔の傷って、どこで?」

おっ、なんか核心をついてくれたような感じになる言葉だ。

「あー。これは前の爆発事件でできたんだよ」

「えっ!?!あの事件の!?!じゃ、まさか!」

「戦人こと、【天照の罰当り】です」

これにより、俺はクラス内で一躍一夏より有名になったのだった。

なんか早くもガンダム制作者ということがバレてしまったが、別にそこまでは良いので問題ない。

「にしても、名前を自虐しすぎだろ」

「別に良いだろ!上手く思い付かなかったんだ!」

一夏にも弄られたが、問題ない。

代表候補生とバトル

昼休みに入り、俺はマドカと一夏で色々世間話をしていた。それぐらいしかないし。

と、思っていたら他の人から声をかけられた。

「あなた方が男性で唯一ISを使える人ですわね？」

「ん？まあ、そうだよ」

「なんだ〜？」

ゆるーい返事。

すると、相手は少し怒ったようだ。

「なんですの、その返事の仕方は！私はイギリスの代表候補生なのですよ!?!」

「へー、そうなんだ〜」

「なあ戦人、代表候補生ってなんだ？」

椅子からずつこける生徒が数人いたが、俺は気にせず説明する。

「代表候補生ってのはな、各国のまあエリートというか、まあそんな感じのISの操縦士ってこと」

「そ、そういうことですよ！」

「へえー」(・▽・)

何やら嫌な予感がするのは何故だろう。

「私は教官を倒した人間ですよ、敬ったらどう？」

「ん？俺も倒したけど」

「え？」

「いや、一夏の場合は相手が勝手に自滅しただけだろ…あ、俺は普通に倒したけどね」

一夏はともかく、俺は圧倒したのである。

壁やら障壁やらをISの脚で蹴って加速し、次々と剣や銃で攻撃して勝ったのである。

何者なのか織斑先生に聞かれたが、俺はもう今は消えた格闘家の技と修練のおかげですと、嘘をついた。

でなきやヤバイだろ。

IS持つてるとか。

完全なバカがやることよ、ソレ。

「な、なんでですか？私だけだと聞いてましたが…」

「女子に限ってって事じゃない？」

一夏とハモる俺。

思わず顔を見て、笑ってしまう。

「わ、笑わないでくださいまし！」

と、ここでチャイムが鳴り、お開きになる。

「では、早速クラス代表選手を決めてもらう」

教壇に立つ織斑先生は、早速お題を出してきた。

「自他推薦、もしくは立候補で決めるぞ」

すると、幾人かの女子が手をあげて言う。

「なら、一夏君がいいです！」

「私も！」

「私もです」

うん、人気だな一夏。

「ちよつ?!?なら、俺は戦人を推薦します！」

珍しく頭を使ってるではないか。

だが、そりやねえだろ。

「やろお！後でムッコロス！」

「何いってんの!?!」

と、コントを続けているとバン！と机を叩く音がした。

「理解できませんわ！代表候補生である私をおいて、ぽっと出の男にクラス代表を任せるなんて！」

「なんだ？お前もやるのか？」

「はい、もちろんですわ！」

「なら、俺達はセシリアにゆず…」

「ダメだ」

「ホワイツ!?!?」

「なら、決闘ですわ!」

マジか……勘弁してくれ。

そして、織斑先生は認証してしまい、来週に決闘をすることが決まってしまった。

「あ、そういえば一夏はISを動かしたことはまともじゃないよな?」

「ああ、そうだな」

「やられたらやり返す、倍返しだ!!」

「あつ……!」

何かに気付いた一夏。

だが、もう遅い。

こうして一週間が過ぎるのだが、どっちにしても俺が決闘することには変わりはない。

ついに来てしまった決闘の日。

勉強含めて、めっちゃ大変だった。

一夏には泣きつかれるし、周りの女子たちは追っかけてくるし。

しかも、その様子をマドカと千冬先生が笑ってるし。

いや、そこはさすが姉妹ですね(笑)

「さて、まだ一夏のISが届いていないから、そのため先に戦人が出ることになった」

千冬先生がそう言うってくる。

ふえー。

「わかりました。じゃあ先に行ってるぜ」

「勝ってこいよ!」

「もちろんだ!」

ちなみに、ISについてはいつの間にか郵便に届いていたと報告している。

というわけで、無所属の専用機持ちになった。

まあ、メンドイが。

「ふう。Hiirガンダム！」

相手はファンネル持ちだと、資料にあったので同じような機体で行くことにした。

「Hiirガンダム、出るぞ！」

全身装甲の青と白のISが、アリーナに飛び出す。

「あら？逃げずに来ましたのね？」

「もちろんさ。受けた勝負はキツチリやる方なんでね」

長大なレーザー砲であるスターライトmk3は、いかにも遠距離仕様と教えてくれる。

「はあ……オールレンジできるやつ造るなら、もうちつとマシなやつがないのかなあ」

「なっ！私のブルーティアーズを侮辱しましたわね!？」

「別に侮辱したわけじゃないさ。ただ、いかにも遠距離仕様のレーザー砲だからさ」

「……絶対に負かしてやりますわ！」

「あ、ちなみに俺もオールレンジ可能だから」

「ふん！どうかしら？」

そして、ゴングが鳴った。

「見せてもらおう、ブルーティアーズの性能とやらを！」

最初に攻撃したのはセシリア。

早速スターライトを使つての遠距離攻撃だ。

が、俺のガンダムにはそんなものは意味をなさない。

「フィン・ファンネル！」

ファンネルのビームを別のファンネルに繋げるようにして、薄いビームの膜が出来上がる。

完全にはないだろうが、あの出力なら防御できるだろう。

というか、無効化した。

「なん!？」

さすがに驚くセシリア。

だが、そんな悠長に待つてられないのが敵である。

俺はすぐにビームライフルをブルーティアーズに向けて撃つ。

4連射して移動し、また4連射する。

「そんな簡単に当たりませんわよー」

まあ、そこは腐つても代表候補生。

避ける。

が、その先にフィン・ファンネル。

「きゃっ!？」

直撃をくらい、体勢が崩れる。

が、すぐに動き出して当てられないように動く。

「やるじゃないかー」

「っ！男のくせに！行きなさい！ビットー！」

ブルーティアーズからビットが展開される。

が、そこに技量の差が生まれた。

元々、逆シャアなどで本体も攻撃しながらファンネルで攻撃するのはガンダム世界の定番の中の定番。

それを見ている俺は、何度か実践すればすぐにできるようになった。

まあ、サイコミュのお陰でもあるが。

一方のブルーティアーズは、セシリアの技量が低いいためかビット操作で本体の動きが止まる。

逆もまた然り。

というわけで、ブルーティアーズのビットはフィン・ファンネルと俺のビームライフルで次々と落とされる。

「なっ!？」

「まだ未熟ー」

オーバーヒートを起こしたビームライフルを捨てて、ハイパーバズーカでセシリアを撃つ。

「それ以上はさせませんわよー」

さすがに遅い弾道は避けてくる。

そして、ビットを再展開して攻撃してくる。

今度は俺の動きを真似しているようで、ビットの動きと本体の動きが良くなっていた。

まあ、俺ほどではないが。

「そうだ、それでいいー!」

とりあえず、称賛を送る。

え?これだと一夏が負ける?

そんなの知らねえ。

男は度胸と覚悟でなんとかできらあ。

多分だけど。

「たあつー!」

スターライトとビットの攻撃が来る。

フィン・ファンネルはエネルギー充填中でまだ使えないし、ビーム

ライフルは運悪くビットの攻撃で破壊された。

バズーカも弾切れで撃てない。

残る飛び道具は、バルカンと腕部のガトリングガンだな。

あと、シールドに備え付けられたビーム・キャノンとミサイルがいくつか。

「よーし、決めてやるー!」

まず、ハイパーメガビームランチャーを取り出し、撃つ。

もちろん、牽制で当てる気はないのですぐに離して右腕のガトリングガンで攻撃する。

「そんなものー!」

多少ダメージを受けながらも、ビットとスターライトで応戦してくる。

しかし、ブルーティアーズを作ったやつはバカじゃねえのか?

真正面から撃たれたビットの攻撃を空中で後ろに回転しながら回避して考える。

観客からなんか驚きの声上がるが今は無視だ。

正直、いくらISが他の技術も向上させるとはいえ、こんな遠距離仕様のブルーティアーズを最強とか強いつて言うのは無理がある。

狙撃をメインとしたオールレンジ攻撃機、試作機ならまだ許せる

が、これで完成されているなんてただの愚か者だ。

「完成されたオールレンジ攻撃機のを、見せてやるよ！フィン・ファネル！」

フィン・ファネルを再展開。

そしてビームサーベルを抜き放ち、斬りかかる。

「くっ！」

ブルーティアーズの近接ブレードを取り出すが、セシリアの腕ではプロ並みの技量を持つ俺に勝てるはずもなく、あっさりと斬られて終わる。

「キヤツ!？」

試合が終了し、戦いが終わった。

ソロモンの悪魔

あの試合の後は、一夏とセシリアが戦い、接戦の末に引き分けに終わった。

セシリアが疲弊していたのもあるが、一夏が途中から動きが良くなったことと、最適化されたのが良かったのだろう。

まあ、すっかりISの特性を解らずにフル出力で零落白夜を振り回していた一夏がエネルギー切れを起こしていたので、これからの成長に期待だ。

セシリアも同じくちょうどエネルギー切れでISが解除されたため、引き分けだが、万全の状態なら多分一夏は負けていただろう。

俺との戦いが活かされており、動きが良くなっていたので、嬉しい限りだ。

とまあ、そういうわけで今度は俺と対戦することに。

いや何故に。

「余興だ。それくらい良いだろう?」

いやいや、やめて。

疲れたから止めて。

「よし!今度は負けねえ!」

おiiiiiiiiiiiiii!!!?!?

やる気満々の一夏が、エネルギーを補充して白式を展開する。

「……はあ」(泣)

織斑皇后殿下様が、すげえ威圧で行かせようとしてくるのでしようがなく行くことにした。

にしても、千冬先生の目がなんとなく生徒を見る目とは違う目をしている感じがするのだが…

「……考えるのはやめだ。とにかく目の前の敵を潰す……!」

今度はガンダム・バルバトスルプスレクスで行こう。

さつさと終わらせる。

一夏が顔を驚愕に染める。

「え？なんで二機目が？」

あー、そういや言うの忘れてたなあ。

「あー、俺のISの特性だから諦めて」

「……………」

やめて。

そんな顔で沈黙しないで。

『始め！』

ゴングが鳴らされる。

俺からいかせてもらおう。

「行くぜ！バルバトス！」

まずはレールガンを取り出し、一夏の白式に攻撃する。

まあ、避けるよね。

普通に避けられたので、次は腕に内蔵されたキャノンを撃つ。

とりあえず二発撃って様子見。

一夏は思いきりよく弾をかわして、前に突撃してくる。

「ウラアッ！」

そこで俺は巨大なバトルメイスを取り出し、白式の剣と打ち合う。

「ぐっ！一撃が重い！」

「意外とできるじゃねえか！」

バルバトスも高揚感に満ちている。

あ、ちなみにそれに関してはあくまでそう感じるだけなので、俺が中二病を発症した訳ではないので、悪しからず。

……………って、おい。信じてないな!?

わかるぞ!?!その顔は絶対に信じてないだろ！

結果的には、俺がまた勝った。

一夏の敗因は……………まあ、武装に恵まれなかったことか。

「おい！なんだよその憐れみの目は！俺だってこんな剣一つだけとか正直嫌だよ！」

「でも、剣だけで結構立ち回ってたじゃんか。あ、そうだ！」

この時、俺はとんでもないことをしていることに気づいていなかった。

そして、一夏も……

「射撃武器、持てるようにしてみるよ!」

「え? マジか!?!」

翌朝、白式を預かった俺は部屋に閉じ籠もるため、カップ麺やおにぎりなどの食品の類いを買っていた。

なにせ、ISの魔改造をやってしまうのだ。

休みの日を潰すくらい、ISの前では簡単にこなすだろう。(魔改造に関しては)

そして、ついに時が来た。

「マドカ、用がないときは声をかけないでくれよ」
「うん、わかった」

こうして、一夏の白式魔改造が始まった……

月曜日の朝。

なんとかギリギリ魔改造に成功した俺は、一夏にISを渡しに行つた。

「で、できたぞ……」

「お、おう……すげえ。目の隈がすげえ……」

一夏が目の隈に驚いているが、俺はすぐにでも寝たいので、魔改造した内容を記した紙を一夏に渡した。

「一夏……これで一夏のISは格段にパワーアップしたぞ……だからよ……止まるんじゃないぞ……!」

「え?お、おい!?!」

寝不足のため、その場で崩れ落ちて寝る俺は、一夏に引きずられて椅子の上に乗せられるのであった。

一夏のI S 白式・オークアンタII (セカンド)

外見は白と青で形成された装甲色。両肩にオークアンタのGNソードビットを搭載するためのシールド兼ビームキャノン兼母体。

一夏専用にチューンアップ・改造を施し、開発者の篠ノ之束の計画を台無しにするほどに強化された。

GNソードビットを合計12基。

白式専用の剣を、形状を変えた上に魔改造と改良を施したGNソードV・ムラサメバスターソード。ムラサメバスターがついている通り、クロスボーンガンダムのを元に、ビームライフル・剣として使用が可能で、必要に応じてビーム刃を纏わせれる。二丁持っている。

腰部アンカーショットは、両足に装着され、緊急回避や攻撃、色々な用途に使える。進撃の巨人の立体機動装置が元ネタ。

背部には、ミサイルが満載されて、広範囲の攻撃を可能にする。

換装によって、両肩にハイパーガトリングキャノンを装備できる。

容量も増えて、予備の格闘兵器にヒートダガーとビームザンバーを二つずつある。

「ちよつと話を聞かせてもらおうか！」

『待てええー！』

「イチカサンナゼミテルンデス!？」

「頑張れ、リア充」(ニヤ)

「オンドウレラウラギツタンデイスカ!？」

とにかく、教室から逃げ出して全速力で逃げる。

マドカはいまいち状況がわからず呆然としていたが、そりやねえよ

！

「ちよつと待ちなさい！話を聞かせなさい！」

「一線越えたの!？越えてないの!？」

「やるなら私を！」

「私を調教して！」

いやちよつと待て。

今後半ヤバイこと言ってるやついなかった!？

と、考えている暇もない！

「これでジエンドよー！」

「うわっ!？」

目の前におどりでたのは俺を追いかけてきた女子たちの一組。

確かにこのままでは、捕まる。

「こなくそーっ！」

女子生徒の一人の股ぐらめがけてスライディング。

驚いた女子は硬直し、そのまま俺は走り去る。

尚、中は覗いていないからな!？

「ま、待てええー！』」

「ウソダドンドコドーン!!」

数時間後、授業にまともに出れず、俺は居残りをくらっていた。

まあ、情状酌量の余地ありと千冬先生が同情してくれたが……なんというか、むなしい。

「今日の所は全部終わりましたね！」

「ありがとうございます、先生……」

なんとか女子に見つからずに部屋に戻ると、俺はベットのの上にダイブして熟睡した。

次の日、一夏と鈴が喧嘩して私闘騒ぎになったらしく、二人とも頭にたんこぶ作って職員室から出てきたのは言うまでもない。

ちなみに、鈴がクラス代表戦で一夏と勝負だと言っていたが、何故か千冬先生の気まぐれにより俺がクラス代表になっている。

確かに全勝したけど、そりゃねえよ！

一夏は安心して少しはっちやけていたし。

後でボコしたが。

と言うわけで、クラス代表戦でどうでるか俺がどうすればいいのか決まる。

いや、確かに優勝は狙うけどさ。

過去の因縁

今日はまた新しい転入生が来るらしい。

もう、何かの悪略では？と感じてしまうほどにこういうのが多い。
いや、実際そうだと思われる。

だって、いかにも女子っぽいのに男子と名乗る男装女子に、いかにも人造人間もしくは強化人間全開の眼帯軍人少女。

クセがスゴいって。

「初めまして！僕の名前はシャルロット・デユノアです！」

「……私の名はラウラ・ボーデヴィツヒだ」

そして、この自己紹介の直後にラウラが一夏を殴りに来るのだが、そこは俺が止めた。

さすがに転入初日に暴力沙汰とか、俺が千冬先生に怒られてしまう。

「ちっ、離せ！」

「悪いが離せんよ。離れた途端にまた殴るだろ」

「……！」

俺の威圧に、少し後ずさるラウラ。

わずかだが、少女特有の怯えの声も聞こえた。

「殴りたいなら後にしな」

「いや、殴らせるのかよ!?!」

「なんだか一夏と因縁があるような感じだけど？」

とりあえず、一旦この話は終わりにし、授業を受けることにする。
ラウラが俺と一夏にめっちゃ殺意を送ってきたけど。

↓放課後

「私と戦え、織斑一夏！」

「え？」

突如、また私闘を一夏に申し込むラウラ。

だが、さすがにこれ以上は一夏を邪魔させる訳にはいかない。

「おい、やるんだったら俺とやれ。初心者痛めつけて何の得が？」

「き、貴様は関係ないだろう！」

「因縁があるにしても、それが何か言わないとわからないぞ？」
「くっ……」

そして語られる、ラウラが一夏に対して殺意を向ける理由。
長くなるので略してしまうが、少なくともこれはほとんど八つ当たり
りに近い。

「だったら尚更だな。やるなら俺とやれ。一夏も一夏で努力してん
だ、それを侮辱するように戦うなら俺は許さん」

「…なら、そうさせてもらう！決闘は明日だ！」

「……へ？は、早くね？」

「……………」

あら、もう行っちゃったよ。

まあ、大丈夫だろ。

「本当に大丈夫か？俺なんかのために……」

「なら俺が任せても良いくらいに強くなれ、一夏。でなきや、いつまで
も守られる側だぞ」

「!!」

どうやら俺の言葉が響いたようで、一夏はその場を立ち去る。

多分、方向からして剣道場か？

とにかく、俺は明日の戦いのために情報収集と戦略を考えなければ。
ば。

次の日の放課後。

私闘の事が千冬先生にバレていたらしいのに、何故か千冬先生が〇
K出したらしい。

えー!?なんで!?

そこは止めるところでは!?

まあ、ともかく千冬先生お墨付きの私闘許可。

さて、ラウラのISはどうやら相手の動きを封じる事ができるらしい。
い。

そして、豊富な武装は集団との戦いにも役立つ。

lon1の戦いだと、かなりの脅威だな。

なので、俺はトリツキーな戦いができるあれにした。

「ふっ、来たか」

「ああ。やってやるさ、このゼファイランス・フルバーニアンで！」

そう、俺が選んだのは試作ガンダム1号機“ゼファイランス”Fb。

まあ、原作見ればトリツキーな戦い方の意味が良くわかんと思う。

まあ、ここでもそうするつもりだ。

「始め！」

千冬先生の開始の合図が。

まず最初に攻撃したのはラウラ。

レールガンとか色々撃ってきたが、軽く避ける。

避けたついでにビームライフルを撃ってみるが、やはり当てられない。

こつちが動き回っているのと、相手が巧みに動いているのもあるからか。

「……こか！」

弾幕の隙を狙い、弾幕を潜り抜け、ビームライフルを向ける。

だが、動かない。

「引つ掛かったな！」

ラウラが嬉しそうな顔で、レールガンを向けてくる。

だが、そのための対策だ。

「パアアーージツ!!」

下半身のパーツを解除し、ビームサーベルを抜き放つ。

これにさすがに驚くラウラ。

「なんだと!？」

「どうやら集中して見なければ止められないようだな!そして……」

ビームサーベルがラウラ機を斬る。

「動揺してるぞ?そんなんじゃないやせっかくの兵器も扱いきれずに無駄になるぞ?」

ISが解除され、ラウラが呆然と立っている。

「まさか…まさか…!？」

俺もISを解除し、彼女に近づく。

「ラウラ・ボーデヴィツヒ。確かに君は軍人かもしれないが、今の君は一人の人間だ。自分を兵器にしたところで、お前はあくまで人間、ラウラ・ボーデヴィツヒという人間だ」

「なら…：なら私は何のために生まれた!?!こんな負け恥を受けて…!？」

「なんで生まれたか? 知らねえよ。だが、生きてるんなら生きろ。生きて何のために生まれたか探せ。負け恥なんてこれからいくらでも来るさ」

「お前は…：一体何者なんだ?」

俺はゆっくりと答える。

「わからん。ただ一つ、確証をもって言えるのは俺は人間だってことだな」

「私は人間か?」

「ああ、そうだ。そもそも形状なんて気にする必要なんてないんだよ。心があつて、誰かのために動ける、誰かのために泣ける、誰かのために憧れを追いかける…：こんな肉体なんてなくたって心がありや人間だよ。改造人間だろうと、強化人間だろうと」

後から思い返すと、自分で穴を掘って籠りたくなるほど恥ずかしい。

だが、後悔はしない。

彼女のために、一生懸命俺が言えるだけの言葉を伝えたからな。

そこまで飛躍するか!？」

「おい、戦人。嫁ってどう言うことですか?」

「おい一夏!?なんで手をグーにしているんだい!?君にもちやんと三人くらい好きな人がいるぞ!」

「二だま(り)なさいですわ!」れえー!」」

「ウゴオツ!」

金髪、侍娘、中華娘の同時攻撃。

いや、鈴はなぜここに!？」

「え?どういうことだ?」

と、ここで騒いでいた奴等に天誅が。

「朝からうるさいぞ!」

バチコーン!

「いだい!」(泣)

「男が泣くのか?」

「男だつて人間だぞ!?痛いときくらい泣いたりするわ!」

「情けないな!」

「…:そんなだから旦那さんが貰えないのでは?」

「なんだと!?では私を貰ってくれるのか!?ええ!」

「重婚しちゃいますから無理だつて!」

大人の力オスな醜い争いに、生徒も先生も啞然とする。

だが、最後の俺の言葉が良くなかったようで…

「え?さりげなく好きだつて言つてない!」

「千冬様もさりげなく告白してるわよ!」

『キヤアアアアアアアアアアアア!!』

あ、まずと思ったときには、「お幸せに」とか「逃がすなよ、千冬姉」
だとか「旦那さん来ましたよ!」などとかささらにカオスに。

「千冬先生、一旦逃げませんか?」

「ああ、私も同感だ」

俺達は逃げ出した!

ラウラとマドカが追いかけてきた!

「待て!嫁は私のだ!」

「違う！私が…いや、私が正妻なら別に大丈夫か……」
「いや、色々ヤバイぞそれっ!?!」

今日も大騒ぎな日常だ。

そして俺に三人の妻ができました。

千冬さんと俺は認めてないが！

先生と生徒の試合

織斑千冬初恋説や千冬・天照婚約者説とかが、校内に噂される今日この頃。

俺と一夏は、一夏のnew白式を慣らし運転させていた。慣らし運転で戦って負けるとか、修理がめんどいからやだしね。そして、ちょうど慣らし運転が終わった頃に、千冬先生がやって来た。

「……天照、少し来い」
「？」

なんか呼ばれたので、行くことにした。

一夏はそのまま寮に戻るそうだ。
で、千冬先生からの言葉を待つ。

そして、その言葉はかなり俺とマドカとしてはとても動揺しちゃうものだった。

「貴様、本当は何者だ？」

「え？別にただの一般の男性ですが？」

「……………」

うん、疑ってるね。

お顔が怖いよ？

「……明日、私と戦え」

「あ、はい……え、??」

言いたいことを言っつて、その場を去る千冬先生。

もう、隠せないんじゃないかと不安になりますわ。

だが、知られたら知られたらで彼女との関係が……うーむ。

次の日、宣言通り戦うことになってしまった。

別に無視しても良いのだが、そうすると今度は無理矢理してきそうだし、千冬先生にずっと弄られそうで嫌だと思い、半ば諦めムードで演習場に出た。

ちなみに、千冬先生との戦いは学園中に広まっており、一種のお祭騒ぎで観覧席には大量の女子生徒たちが所狭しと今か今かと待っている。

千冬先生はとつくのとうに、彼女用にカスタマイズされた打鉄を展開させて待っていた。

俺は今回は使用する形態はガンダム・バエルだ。

ある意味意趣返しでもある。

いや、ほぼ仕返しだ。

それを証明するように、一見白騎士を連想させる姿に観客も千冬先生も驚いている。

まあ、千冬先生の場合は驚き半分、嫌な顔半分という感じだが。

「……私は近接戦が得意なのは知っているだろう？」

「千冬先生はその剣の腕を見たくてね。まあ、貴女の舞台上で戦ってみたいというのもありましたね」

「後悔するなよ……」

千冬先生の顔が、真剣なものになる。

雰囲気も鋭くなり、俺も集中することにする。

そして、先に動いたのは俺。

背部の翼のような二対のスラスタバインダーから、レールガンを

発射する。

しかし、簡単に避けられて距離を詰められる。

バエルのレールガン発射時、隙が大きい。

すぐ様バエルソードを前に掲げて、防御の体勢をとる。

ガキンツ！と打鉄の近接ブレードとバエルソードがぶつかり合うが、押されたのは俺。

「中々頑丈だなっ！」

「持ち武器はこれだけですからねっ！」

「なに？」

スラストスターを全開にして、打鉄から急速に離れる。

（イグニッション・ブースト……あれを使いこなしている時点で、一般人ではあるまい……）

無意識で使っていることを、彼女は知らないが、俺としてはそんなものがあることを知らないというか、それに分類していなかったたので、隠し事をしていることは彼女からしたら一目瞭然なのだろう。

いや、ISを持つ者ならほぼわかるはずだ。

まあ、俺は知らずに使いまくったし、誰もそんなことを言ってくれなかったし、どうしようもないか。

まあ、簡単にまとめれば俺は最初から隠せていないということだな。

「うおっ!?!」ガキツ！

「ちっ、防いだか」

近接ブレードが、嵐のように俺のシールドエネルギーを削ろうとしてくる。

俺はそれをニュータイプの直観と洞察力、そして経験から紙一重の所を避けていた。

初めての時は、戦い続けていたら俺が負けていただろう。

俺はあの時、逃げるに徹したから、逃げられたただけだ。

しかし、今回はそうもいかない。

まだ正体をさらす気にはならないし、まだ一年もたっていないのでバラすにしても時期不相応だ。

「バエルっ！お前の真の力を見せてみる！」

阿頼耶識システムの力を解放する。

とはいえ、まだ半分くらいのリミッター解除しかできない。
でなければ、強烈な加速についていけない。

「動きが変わったか！」

「うおおおおおーっ！」

激しい剣による打ち合い。

近接ブレードを二つ出して対応している千冬先生は、笑みを浮かべながら戦う。

強者と出会った事を喜ぶ笑みを。

「てえええやあああーっ！」

「…ふんっ！」

まだこちらにはダメージは来ていないが、いずれ直撃を受けてしま
いそうな紙一重の回避をしている。

いずれ当たってしまうのではないかと、我ながら不安だ。

「決める！」

「やって見せる！」

バエルソードが近接ブレードとぶつかり合う…

その時だ。

ドゴオオオーっ！

強力な演習場のシールドを突き破り、侵入してきた異形のIS。

「AIで動いてんのか…?」

「ええい！どうなっている!？」

戦いの間に水を差された千冬先生は不機嫌そうだ。

いや、確実に不機嫌である。

俺は、目の前に立つ不気味なISに剣を向けるのだった。

強襲

突如乱入してきたISは、よくみると人ではなく人間の女性をかたどったロボのようなものだった。

つまり、無人機。

「無人機か……」

「なんだと……？」

千冬先生が怪訝そうな顔をする。

だが、無人機には人間にしかない柔軟な思考……工夫がない。

経験を積んだものなら別だとは思うが……

「だが、しかし！そんなものでは俺には勝てんさー！」

バエルからナラティブガンダムB装備に変更する。

「ていつー！」

ビームライフルを撃ち、バルカンで牽制する。

しかし、このバルカン。

何故か異様に威力が高いため、被弾覚悟で突撃した無人機があつさりシールドを半分削られる。

「インコムっー！」

今度は背中に搭載されている有線のファンネルを射出し、無人機二機のシールドを全損させる。

一方、千冬先生は剣とサブマシンガンですでに三機撃墜していた。

「やっぱ強いな」

そう思いながらもミサイルを撃ってさらに二機を撃墜している俺もすごいのだろう。

多分。

「織斑先生！外にも同型のISが！」

コントロール室からの通信から、外にも敵がいるようだ。

「ちっ！戦人！私が責任を取る！外のやつらも倒せ！」

「了解！」

俺はB装備からA装備に切り替える。

「ナラティブガンダム、天照戦人、行きます！」

スラストターを全開にして、無人機によって穴が開いた場所を通る。急加速により、身体中がギシギシと音をたてた感じがする。

「間に合ええええーっっ!!」

一方の一夏は、外にも無人機のISがいることに驚きが隠せないでいた。

「な、なんだよこれっ!?!」

「このままでは……!」

一夏とセシリアは背筋に冷や汗が流れるのを感じた。

無人機には、他の先生方が応戦していたが意外と無人機的能力は高く、次第に押されていた。

「くそっ!俺も……!」

ISを起動しようと一夏が思念を飛ばそうとするが留まる。

(いや、ここでISを装着して出ても足手まといになるだけだ。戦人さんが言ってたことを思い出せ!)

ラウラとの一件で、戦人に言われた言葉はかなり一夏の中では響いており、その言葉が彼を押し止めた。

そして、今自分にできることを考え、行動に移した。

「ここに俺達ができることはない……セシリア!避難誘導するぞ!」

「……わかりましたわ……!」

セシリアも一瞬、ISを纏って戦う事を考えたが一夏と同じような結論にいたり、彼の結論と同意した。

戦人による影響は、段々と現れているようだ。

「敵機を一掃する！先生方、カウントダウンするんで、射線をあけてください！」

「な、何を!？」

「十！九！八！」

「くっ……総員散開！」

「五！四！三！二！一！ハイメガキャノン、発射！」

人がそれを身に受けたら絶対に消滅するだろう熱量を持った太いビームが、無人機たちに当たる。

ちなみに、止まらなかったハイメガキャノンのビームは、演習場の壁にぶち当たり、そこで止められた。

穴開いたけど（笑）（。▽。）

「なんて威力だ……」

思わず身震いする先生方。

まあ、確かに当たっていたらISの絶対防御があるとはいえ、人体が自然発火してもおかしくないだろう。

無人機は消滅しており、残りは数機ほどだったので、ミサイルやビームソードで掃討してこの事件は終わった。

しかし、もし進行方向に町があったら大惨事だった。

気を付けるなければなるまい。（――〇――）

クラス代表戦

あれから数週間。

特にヤバイ事件もなく、普通の日常を送っていたが、俺は忘れていた。

「クラス代表戦あること忘れてたアアーっつ!!」

「うるさい……」

着替えている最中に、突如思い出した俺は思わず叫ぶ。

そして、同じく着替えていたマドカが朝起き直後の上にうるさいためか、機嫌が悪くなる。

「あ、すまん……」

大人げなく叫んでしまったが、マジで忘れていた。

久しぶりの平和な日常で、つい平和ボケしたよ!

なんなん、これ!?

朝飯を食って、教室に向かい座る。

うむ、平和な日常である。

「……………はあ」

やばい。

後数日でクラス代表戦だわ。

いくら経験値があるとはいえ、特訓やら訓練やらしなきゃなまるぞ

……

「どうした? 戦人?」

「クラス代表戦の特訓忘れてた……」

「あ」

「わ、忘れていたのですの……?」

やめてよ、セシリア。

そんな目を向けないで。

俺をそんな目で見ないで!!

「よし、一夏。明日から君がクラス代表だ!」

「なんでやねん！」

「ウソダドンドコドン！」「（、口）ノ。△。」

頭をおもいつきし叩かれた。

いてえ。

「叩いたな……！親父にも叩かれたことないのに！」

「ここでガンダムネタが来るか！」

「何をやってるのですの……」

「ただのコントだ」

冷たい反応の筈と、理解ができていないセシリア。

色々寂しいな。

まあ、そんなことがよくあり、そして大半はそんな感じでその日を過ごす。

だが、今日から筋トレなり、特訓なりしないと負ける可能性が濃厚になるので頑張るが。

こうして数日、ずっと放課後はISの特訓や筋トレをしていた。

まあ、もちろん趣味のゲームやガンπρα作り、動画作成はやっていたが。

そして、クラス代表戦当日。

国のお偉いさんもやって来る、この大会（？）はスカウトが来たりと色々プラス面に行く、普通の人にとっては大事な日になる。

まあ、普通の人ではない俺はそんなことは関係なく、ただこの大会を楽しむだけなので、問題ない。

「一夏、お前なんで頭が実験に失敗した感じのパーマになってんだ？」
問題は一夏にありました。（笑）

「いや、なんかいつの間にかこの髪型になってた。…笑うな…」
「す、すまん(笑)」

いやあ、笑った笑った。

さて、対戦相手が表示される。

「鈴か……」

「勝てるだろ?」

「いや、わからんぞ? 戦場はいつでも気まぐれだからな」

「ちよつといつてる意味が重いし、分かりにくい」

そうか?」

まあ、確かに解りにくいとは思うけど。

会場のピットに立つと、ちよつど鈴が出たらしく、観客の応援や歓声がよく聞こえた。

「俺は……これでいくかな」

俺は熟考して決めた機体にする。

「G―セルフ!」

全身装甲型の俺のISは、俺を包み込んでその姿になる。

なので、完全に原作再現であるので、ガンオタとしてはこれほど嬉しいことはない。

まあ、原寸大ではないのがたまにキズか。

「バックパックはこれで……コートルクパックは……うん、これでいいか」

ピットにある、カタパルトに足をのせる。

何やら生徒たちの要請で、今回からカタパルトが設置されることになったらしい。

確かにカタパルト射出はかっこいいが、体にかかる負担が大きいから戦う前から疲れるんだよな。

まあ、カッコいいからいいけど!

「天照戦人、G―セルフで出る！」

カタパルトが動く。

体に強烈なGがかかり、少し、いや結構息苦しくなる。

だが、まあやはりカッコいいし、ISのエネルギーを無駄に消費することもないからそこら辺が評価されて導入されたのだろうけど。

「来たわね。あんたを倒して、一夏に良いところ見せるんだから！」

「わざわざ勝たなくても、頑張ってる鈴がいればアイツは喜ぶと思うけど？」

「なっ……！」（〃▽〃）！

あ、顔を赤らめてる。

今度、話を聞きに行ってみるかな？

「と、とにかくあんたは倒させてもらおう！」

「やれるもんなら、やってみな！」

開始の合図が鳴る。

まずは距離をとってビームライフルで戦う。

鈴のIS【甲龍】は、特殊兵装が特徴的なイメージだ。

一夏からの口伝で、ある程度の能力は知っている。

しかし、実戦と話で聞くとはまるで違う。

ポンコツな頭をフル回転させて、充分マージンを取れる機体で行こうと決めたのが昨日。

機体の選別はついさっきだ。

そんなことを思い出しながら、ビームライフルを撃ちまくるが、まあ避けられてる。

たまにバルカンも撃ち込んでいるが、それさえも避けて見せる。

こりや気を抜けない相手だわ。

「行くぞー！G―セルフ！」

地上用パックからアサルトパックにバックパックを換装し、高火力のミサイルやビームキャノンを撃ちまくる。

「何よその機能!？」

換装したことに驚きが隠せないのか、思わずといった感じで叫ぶ鈴。

「戦場は常に無慈悲なのだよ！」

俺は適当にそう返して、さらにビームキャノンを撃ち込む。

ミサイルで足止めされ、ビームキャノンによる高威力の攻撃。

さすがに二発ほどヒットして、シールドエネルギーが削られる。

「まだまだっ！」

今度は鈴が突撃してくる。

真っ直ぐに飛んでくるが、多分ビームキャノンでも寸前で回避しそうなので、アサルトパックからコートルクパックに換装する。

「今度は防御力を上げたつもり？」

「防御力だけじゃねえぞ！」

背部にある大きな大出力スラスタターが、噴射される。

これにより、爆発的な加速でこちらもあちらと同じくらいのスピードで接近し、右手で殴る動作をする。

その速さと、右手に何かあると感じた鈴は、すんでのところで横に緊急回避。

代表候補生に恥じぬ動きを見せつける。

「避けたか！」

「強い！」

今度はコートルクパックから、宇宙用パックに変更する。

そして、コートルクパックは自立起動してこちらの命令通り全速力で甲龍にぶつかりに行く。

「はっ!?マジで!?!」

意外なことばかりで、思わず動きが止まり、当たってしまう。

しかも爆発もするので、ダメージは大きい。

「ぐうっ!?!」

「サヨゴー!!」

追撃とばかりに、俺は緑に変色した脚で踵落としを決める。

ついでに意味不明なセリフも吐いて。

「シールドエネルギー全損確認！勝者、天照戦人！」

ワー！と歓声上がる。

いつの間にか削りきったようだ。

俺は鈴の落ちたところに降りて、手を差し出す。

「ナイスフアイト」

「……おめでとう」

ツンデレ出しやがって。

何だよそれは（笑）

おや、シャルロット・デュノアの様子が……

とりあえず、一回戦が終わったので一度更衣室に戻る。
そしたら何が見えたと思う？

俺のパンツ嗅いでる男装痴女がいたのである!!

「な、なにやっつてんだ、シャルロットちゃん………??」

「スウー（恍惚）……え？……はわわっ!」

めっちゃ恍惚な顔で俺のパンツを嗅いでいたシャルロットちゃん。

いや、おっさんのパンツ嗅いで何か得があるのか？

……一部の業界では需要はあるか………

「え、えーとーん、これはー!」

「わかったわかった。君は男装好きの痴女つて事で、何も言わないで
あげるから早く帰りなさい………」

「うっ………（半分事実だから反論できない………）」

……なんでそんな大事そうに俺の替えのパンツ持つてるの？

ちよつとそろそろ元の場所に戻してくれないかな？

いい加減、こちらも恥ずかしい。

「あの一、シャルロットさん?」

「あ、あ、あ……ごめんなさいっ!」

いや、謝るのは良いけどなんで逃げるのかな!?

しかも俺のパンツ持つてっつたし!

最近マドカが俺のパンツ盗っちゃうから、後は明日のパンツしか
ねえんだよ!!

一応、この日のクラス代表戦はもう俺が出ることはないようなので
気兼ねなくシャルロットちゃんを追える。

で、追っかけて探し回った結果、彼女の部屋に辿り着いた。

「おーい、シャルロットさーん?俺のパンツ返してくれー!」

「ひゃ!?す、すみません!い、今開けます!」

ボタン！と開けた彼女は俺の服の裾を掴んで部屋に引っ張りこんでくる。

中は真つ暗で、うつすらとしかシャルロットちゃんが見えない。

「あの一、そろそろパンツ返して」

「……嫌です」

「さんざん追いかけてこれかよ!？」

「僕だって…僕だって戦人さんの事が好きなのに……!？」

「ちよっ!えう!？」

「最初から女の子つてこと、解つてましたよね?」

「え?ま、まあそりゃ雰囲気に声が女だもん。気付かない方がおかしいような気がするぞ」

「僕、当初はファンだったんだ。ガンダムの」

「あー…ありがと…」

まあ、以前フランスとか色々な所でサインとか求められたしね。よく覚えてる。

「でも、戦人さんがISに乗れることを知った時、僕は驚いて、そして思ってたんだ。もう一度会いたいって」

「うん、わかった……(なんか重い!)」

「それで、お父さんから一夏さんや戦人さんのISのデータなどを入力してこいって、言われて僕は喜んで受けたんだ。また会えるって」
な、長いけど我慢だ。

聞いてあげないと、後々に面倒+死に繋がる気がしてたまらない。

「それで、転入したとき僕は戦人さんに惚れたんだ。勇ましそうでなんだか哀しそうな顔が」

「そ、そんなんで俺を好きになっても後々違うって気付いたらどうすんだ?」

「間違えるはずがない!僕は…僕は戦人が好きだ!一目惚れだよ!戦人が描いたガンダムの主人公たちに似てる!僕の好きな人物像に似てるんだ!」

つまりは、タイプだったと。

ほんとにそれでいいのか?

その判断で後悔しないのか？

と、聞いてみたところ。

「せ、戦人なら…戦人とならいつまでも一緒に構わないよ…！戦人は優しいから…！…」

「……………本音は？」

「筋肉と傷がカッコいいし、逞しいから惚れました！それに、さっき話したことは全部ほんとだから！」

そこまでハッキリと言われたら、俺はどうすりゃいいんだよ。

据え膳食わずはなんたらかんたらってあるけど、まだ彼女たちは未成年。

マドカの場合は特殊な立場なので、彼女の好意は素直に受け取ってあげた。

しかし、シャルロットやラウラは普通の女の子。

しかもシャルロットに関してはIS会社の社長の娘。

まあ、愛人の子供ではあるが、そうであることには変わりはない。

俺が手を出して、彼女たちの人生に悪影響を与えてしまつてはただの屑に俺は成り下がる。

それに、そもそも俺はこの世界の人間ではない。

体も何故かニュータイプの方に目覚めたし、そもそも俺の持っているISは謎が多すぎる。

そんな男が、ハーレム作つて突如消えたりでもしたら…

大暴走だろうな。多分。

「戦人？聞いてる？」

しかし、彼女は本気のように。

涙流してるし、動機はとても不安な物だが好意はわかった。

「ふう…：…シャルロットさん、ほんとに俺で良いのか？後悔しないのか？」

少し間を開けて、シャルロットちゃんは答える。

「もちろん！僕は戦人が好き！愛してるんだ！」

ガバツ、と抱きついてきた。

う、よく見ると彼女の服装はきわどいネグリジェだった。

絶対誘ってるだろ!! (焦)

「……わかったよ。あと、お前が男装してることと君の任務に関して俺が何とかしてやる。あ、男装に関しては黙ってるだけだけど」
「え……??」

シャルロットが困惑するなか、新たな乱入者が。

「シャル！告白は済んだようだな！ならば、夜の営みというものをしようではないか！」

「ハーレムを作るのは正直反対だけど……みんな好きみたいだし、しょうがない」

ラウラにマドカだった。

え？しかもハーレムはマドカ公認!?

「いや、待てよ？まさかみんな最初から仕組んで……」

『ニヤア』

は、謀ったな！マドカ！謀ったな！

「じゃあ、まずは私からね」

「ま、待てマドカ！マジでこれは洒落にならん！二人ならともかく、3人もなると……!」

「どうにかしてくれるんでしょ？人生の先輩？」

「ぐうっ!」

結局、コツテリと彼女たちに搾られて疲労困憊になりながらも自室に戻った。

飯がスタミナ丼だったのは、気のせいだろう。

次の日、朝から登校したら千冬先生からクラス代表戦がなくなったことを聞いた。

何故か聞くと、なんと建築物の中に欠点があつてほつとくと明日にでも壊れそうだとか。

意外なハプニングに巻き込まれながらも、結局日常に戻っていく。

まあ、次は臨海学校だ。

彼女たちの水着姿……ははは……

その日の夜、今度は夜這いされてみんなまとめて相手したのは余談である。

次の日が土曜日だったので、それもあつての行動だろう……まだハーレム人員が増えそうな気がするのには気のせいかな？

ニュータイプの勘が、伝えてくるんだけど。

っーか、俺はハーレムやってるけどシバかれても俺はなにも言えん!?

水着に生徒会長

天照ハーレムが結成され、なんとも言えない状況になったこの頃。ついに、夏が到来した。

「暑い……」

「一夏、俺は外国を周ってたんだがこれよりもっと暑い所に行ったことあるぞ?」

「まじか」

机にベツタリとなりながらも、世間話をする俺と一夏。

なんかとても奇妙な状況だ。

だって、大人の男と青年に近づく少年がそろって机の上でグツタリとしているのだから。

「みなさーん!ホームルーム始めますよー?」

山田先生が教室に入ってきて、俺達は暑い中頑張って授業を受けた。

さて、

夏と言えば何だろう?

色々あるが、このIS学園ではあと一週間ほどで臨海学校に行くことになっている。

さすがにこれでまた一騒動あるなんてないとは思いますが……(フラグ)

女子たちは水着で盛り上がってる。

一夏を悩殺するためだろうか?

まあ、俺には関係ない。

俺にはハーレムがあるのだから……(泣)

で、彼女たちの水着を買うのに付き合うことになりました。
正直、暑い中行くのは嫌だったがシャルが怖い顔をしていたので
渋々。

シャルの尻の下に敷かれるビジョンが見えたよ……

「戦人、これは可愛いか？」

「おう、可愛いぞ」

黒いストライプが入った水着を俺に見せてくるラウラ。

みんな可愛いか？と聞かれるが文句なしに可愛い上に綺麗な三人
は、何を着ても映えると思う。

「せ、戦人、これは似合ってるか？」

「ブフツ!？」

マドカがきどわい水着を着て、俺に聞いてくる。

さすがにそりゃ駄目だろ!？」

「マドカ……それはプライベートの時にしろ……」

「う、うむ……」

照れながら着替え室に戻るマドカ。

こちらを見ている女性店員さんが優しい目で見てくる。

これが男性だったか嫉妬の目を向けてくるだろう。

まだマシな方だ。

「戦人……これでいいかな？」

シャルが黄色の水着を着て、着替え室から出てきた。

「……君達は何を着ても良いよ……」

「ありがとう!じゃ、私はこれにしよ!」

と、言っ手にしたのは水色の水着。

俺は精神的に疲れながらも、彼女たちの買い物に付き合った。

ついでに俺の水着も買われたが、さすがにそれは自分で買わせてと頼んで自分で買った。

ダークレッドのズボン型の水着です。

寮に戻って、すぐにベットの上に寝そべる。

同室のマドカはトイレらしく、道中で別れている。

「ふあ……疲れた……」

あくびをして、眠いのでこのまま寝ようとする。

そして、それは来た。

「ううううつつつ!!」

突如、俺の右半身がとてつもない痛みが走る。

「がっ……かはあっ!?!」

幻痛。四肢のどれかを失うとたまに起きる、ケガの後遺症のようなもの。

俺の場合、右半身がぐちゃぐちゃに破片や爆風を浴びているのでもしかしたら来るかもなんて、医者に言われていたが……

こんな日に来るとは……

「くっそっ…ぐうううーっ!?!」

激しい痛みが俺を襲う。

「戦人!? どうした!?!」

戻ってきたのかマドカが、駆け寄ってくる。

あまりの痛さに、ベットの上で暴れる俺にマドカはどうしていいかわからず、ただ俺を抱き締めた。

それにより、俺は動きを制限され彼女の腕の中で暴れるが次第に痛みが引いていき、収まる。

「……………戦人?」

俺の意識は落ちた。

次の日、心配そうにマドカが容態を聞いてくる。

それに俺は大丈夫だと答えた。

あの痛みは、とてもじゃないが耐えきれぬ自信がない。

しかし、これからもこの体と付き合うのだから我慢でしかない。とりあえず、鎮痛剤を今度買ってこよう。

もちろん、医者のお見とかも聞いてね。

「ねえ、そこのお兄さん」

「ん？」

突然声をかけられたので、後ろを警戒しながら向くと水色の髪をした少女がいた。

だが、その姿……いや顔も含めて見たことがある。

「私は更織楯無、ちよつとついてきてもらえない？」

日本の対暗殺部隊的な立場の一族の一人、更織楯無。

IS学園最強の生徒会長。

その人が俺の前にいた。

フルアーマーの魅力

うーん、なんだこの既視感は。

なんでまたアリーナで訳もわからず、勝負だ！とか。

「貴方、本当は日本の人じゃないでしょ？」

「!!」

彼女からの口から、とんでもないことが暴露された!?

顔には出していないがな。

「それで？証拠はあるのか？」

「んー、明確にはないけどそれでも偽造されていることがわかったよ」

「ははは、そこまで解っちまってるなら俺から言うことはないな。それなんでこんなことを？」

すると、彼女は一息して答える。

「貴方が赤い彗星か、見極めるため」

「おいおい……………まさか憧れの人？」

「ちよっ!?!なんでわかったの?!」

えっ…マジで？

「いや、ただの勘なんだけど」

「むー……………まさか勘で敗れるとは…せんせんすごいね」

「せ、せんせん？」

「ぞ、せんせん！」

と言った直後、ISを起動した。

それを見て、俺も起動する。

「それで、ハンデとかいる？」

「いや、いらぬよーそれは舐めすぎだよ！せんせん！」

うわ、いきなり大型ランスで突いてきたよこの人。

確かこの機体にはアクア・クリスタルという、水を操る能力があったはず。

ナノマシン技術か。おい、Vパクったな!?

ともかく、ランスには四連装のガトリングもあって近づきにくいし、そもそも水の盾があるからさらに近づきづらい。

そして、今の俺のISはとっさに展開したので初代ガンダム。とりあえず、全武装使ってから変えるか？

「ハイパーバズーカ！」

二連装バズーカで迎撃する。

もちろん、バズーカの弾は水で流される。

「ビーム系は威力が半減するからな……ハイパーハンマー！」

「ひよいー！」

かわされた。

ありや、こりやだめだ。

「さて、そろそろ本気で行かせて貰うよ？」

【ミステリアス・レイディ】。

それが更識楯無のISで、その名の通り謎めいている。

そして、戦い方も。

「ちっー！」

霧に包まれてしまった。

俺は霧から出るために、上へ向かう。

が、シールドエネルギー小爆発で削られていく。

少し、少しと。

「ええい！フルアーマーガンダムッ!!」

機体を変える。

そして、ミサイル全発射。

「陽気に行こうぜええー!!?!」

「え……ジャズ？」

【BGM：サンダーボルト・メインテーマ】

唐突に聞こえるジャズに、一瞬驚くがすぐに戦闘に集中する楯無。

偶然アリーナにいた生徒たちも、突然流れるジャズに驚いていた。

俺は二連装ビームライフルを、勘でいるだろう場所に撃ち込み、左腕のシールド裏に取り付けられたミサイルランチャーを放つ。

「っ?!なんて勘!!」

「何故か勘はいいからなあ！逃げねえと落ちちまうぜ？」

「ねえ?!口調変わってない!」

しかし、やはり水の盾があるのは厳しい。

あれは諸刃の刃だが、それでも強い。

性能に振り回されず、扱えてる楯無も強いので正直、舐めプだった
ら確実に負けている。

第二章 真夏の海で嵐は起こる ようこそ！MS水泳部へ！

ついにやってきました臨海学校！

IS学園の寮から、この【MS水泳部】という完全に一時の過ちをしているこの旅館にやって来ました！

……でも、この旅館見覚えがある。

確か、かなり前に目の前の旅館をイメージ図で描かれた書類が来た気がする……

「ウソダドンドコドーン!?!」

「どうした!?!どうしたんだ、戦人おおー!?!」バゴツ

と、ここで出席簿が俺と一夏の頭に落ちてきた。

「こんなところでふざけるな。さつさと挨拶をして割り振られた部屋に行け」

「う…、了解です、ち、織斑先生」

「了解……」チラツ一ム。チラツ

「……っ／＼／さつさと行け!」

うーむ。

やはり前の事をまだ引きずっているようだ。

あのバーでの出来事は、俺もまだ気にしてるから何とも言えないが

……今はいい。

今はとりあえず、荷物を置きに行かなければ。

さて、荷物を置いたらすぐに海水浴らしいのでさつさと水着に着替えて外に出た。

「……ほんと、改めて見ると凄まじいよな、戦人さんの傷」

と、一夏に出会い頭にそう言われた。

「まあ、でもこの傷は誰かを守れた結果として思ってるから、少し誇らしくも思うけどね。でも、やっぱこりや上は着た方が良いな」

「なんでですか？」

「……………箒、こりやストレートに行かんととられるぞ？」

「ん？」

「いや、何でもない。…お前な、この傷をお嬢様方が見たらどうなると思おう？」

「あ……………」

コイツ、ほんとに人間やってんのか？

まあ、一夏はクローンだとか聞いているがそれは関係ないにしろ、人格は良いのに機敏さがねえ…………

「一夏、刺されないようにしろや」ポン

「え？…ええ？」

なんかそんな感じになって一夏とは別れる。

シャルとマドカ、ラウラはもうとつくのとうに集合場所に集まっていたようなのだが…………

「おいラウラ、なんだそのミイラ状態は…？」

「ムムム…………／／／」

「ラウラがさつきから照れてて、この包帯を離さないんだよ」

と、シャルが状況を説明してくれる。

「ラウラ、時間は有限だぞ？ 邪魔なもんは取っ払えよ」

「ム…了解した…」

あれ？ なんか変な解釈してないよな？

なんだか別に包帯を取れば良いのに、何故か水着を脱ぐようにクネと動く。

「ラウラ、そういう意味ではないぞ」

おっと、変わりにマドカが。

「ム、そうなのか」

「…勘違いやめてほんとに」

本当に精神的にやばいので止めて。

普通に包帯を外してもらい、俺達は他のクラスメイトが始めたビーチバレーに誘われて、やることになった。

ちなみに、ラウラの水着はとても似合っていて、そしてビーチバ

レーではボールを殺す威力で打ってきた事を記述しておく。

さて、ここで俺達が泊まる【MS水泳部】というふざけた名前の旅館について説明しよう。

この旅館は流行りに流行っているガンダム作品を俺の許可によって建てられた。

外国人や政治関係の人、はたまたかのアメリカ大統領までもがこの旅館に泊まりに来たらしい。

どんだけすごいんだよ、この世界のガンダムパワー。俺の世界でもそうなら良かったのに。

それはさておき、この旅館の魅力は俺が作ったガンダム作品のキャラや水陸両用モビルスーツをふんだんに使っている。

つまりは、水陸両用モビルスーツたちの楽園である。

特に海に関係する人達に人気で、潜水艦の研究にも役立っているとかないとか。

大きさはかなりで、中庭も存在する。

中庭は最初の水陸両用モビルスーツだからか、ズゴックの像が建っていて、赤く塗られたシヤア専用になった。ワーオ。

そんな俺の存在を黒歴史みたいにするこの旅館、3食付き一泊九千円。

風呂やその他のオプションを使うと一万は超える。

しかも、ガンプラが売られていた。

主に水陸両用モビルスーツだったが。

「なんか、本当に世界の有名人なんだな」

「一夏、喧嘩を売ってるのかな？」

「こんなのあんまりだ……………」

嵐が近づく

自由時間は終わり、明日からISの訓練。
その英気を養うための晩御飯が、待っていた。
うむ。マジで旨かった。

ただし！あのキノコてんこ盛りの野菜サラダはいけ好かん！
なんだ、あの俺を苦しめるためだけに生まれたようなキノコサラダ
は!?

俺はキノコは好きじゃねえんだよ！

さて、明日はすぐにでもISの訓練だ。

早く寝よう。

ー次の日ー

「あの一、ラウラさん？シャルさん？なんでここで寝てるのかね？」

「ムニユ……戦人の匂い好きい」

「嫁である私が婿であるお前と子を成そうとするのは自然であろう
？」

「いや、その年で子作りは早い！それに子供産むにしてもその体じゃ
出産に耐えきれんわ！」

「…ちゃんと考えておるではないか」デレデレ
「ぐううう……」

朝からシャルとラウラが布団の中に入ってきたのである。

シャルはまだ寝ぼけて、ラウラはさも当たり前のように俺の問いに
答える。

さて、何とか彼女らを部屋から出して寝巻きから学生服に着替える
と、千冬先生からお呼び出しが。

一夏や他の専用機持ちも集められるようだ。

「さて、行きますか」

で、やって来た。

そしたら篠ノ之束がやって来て、マドカと箒にいつの間にか新しい
ISが渡されていた。

束さんは俺を見て、一瞬殺気を飛ばしてくるがすぐに消した。

「ちーちゃん、ちよつとセン君借りて行って良いかな?」

「…余計なことはするなよ」

「おっけー!じゃ、ちよつとついてきて」

「わかりました」

彼女について行くと、何も無い波がうちつける岩場で止まる。

「それで、俺に何のようですか?束博士」

「博士はいらぬいよ♪束で良いよ!」

さて、ここから本命だ。

「で?何なんです?俺を殺しに来たんですか?」

「そんなのとんでもない!最初は殺したいと思ってたけど、君のプロ
ファイルを見てからそんなのどーでもよくなっちゃった」

良かった、殺されずに済みそうだ。

「君はこことは違う、異世界…詳しくいうと平行世界から来てるよね
?」

「そこまでわかるなら言うことはないでしょう?」

「実はね、君のISに興味があるんだ。セン君自身にも興味はあるけ
どね」

「はあ…でも、俺もよくわかりませんよ?それに、暴走したISが
こつちに向かってんでしょ?あまり長くは話せないですよ?」

「じゃあ、単刀直入に言うね。マドカちゃんの事だよ」

マドカの事で?

何故だ?

「実は、フロントムタスクは私が密かに作り上げた組織なんだけど、
段々と女尊男卑の人達が加入してきてね。暴走寸前だったんだ、だか
ら君が駆逐してくれたおかげで本当に必要な人員だけを助けだせれ
たよ」

「フム。つまりはあん時は全部計画通りと？」

東が首を横に振った。

「ううん。イレギュラーが一つ。それはマドカちゃんの行方が解らなくなっただけのこと」

「そうか……それに関してはあんたも解らなかつたということか？」

「そうだね。しかも、君に助け出されていたとは思わなかつたけど、予想はしていた」

嘘はないかな？

まあ、心理学者でもないので勘でしかないが。

「で、マドカを返せと？」

「本当はそうだったんだけどね。マドカちゃんが完全にセン君惚れてるみたいだし、その時が来るまではセン君に預けておくよ」

「何をさせるつもりだ？」

「腐敗した世界の粛清」

「逆シヤアかよ」

「何それ？とても興味が湧くね」

「隕石落としすんなよ？」

「へえ……そんな内容なんだ」

なんかかんやで、作戦の立案の時間が来た。

目的は暴走したISを止めること。

シルバリオ・ゴスペルか。

作戦は、一撃必殺の威力を誇る一夏の零落白夜で一気に勝負をつけるというもの。

シヤル、ラウラ、鈴、マドカ、箒は本命の援護。

セシリアはブルーティアーズの新しいパッケージで、一夏の輸送。

俺は本命の失敗の時に、最後の切り札として。

正直、俺が本命でもいいのだが、撤退するときには熟練の俺が殿になれば安心……ということらしい。

俺は盾かよ。まあ、自分より若い命が目の前で消えるよりはマシだけどさ。

作戦は刻々と近づいている。

作戦の決行は時間的に夕方。

それまでに、セッティングや調整をすませることを義務付けられる。

まだ青い空に、月が見える……

戦いは二手三手、先を読んで戦うもの

砂浜に立っている人影が多数。

ありやりや、俺は遅刻かな？

「すまん、遅れたかな？」

「ギリギリよ！」

「おい鈴、戦人を叩くな」

「おいおい、戦闘前にさっそく喧嘩かよ…まあ、それぐらいが丁度良
いのかもしれないが。」

「ほら、行くぞ」

俺はISを展開して、空に飛び出す。

「作戦を開始するぞ」

『了解！』

今回はアストレイガンダムブルーフレームセカンド改で出撃する。

一夏は俺が魔改造した白式を纏い、セシリアのブルーティアーズに
掴まる。

「とっとうち行って終わらせるぞ!!」

戦闘は膠着状態だった。

ISコアが独自に動き回り、中々当てられない。

しかも、切り札の零落白夜も避けられてしまった。

まだエネルギーに余裕はあるだろうが、まだ成長途中の一夏にそんな芸当はできない。

なので、俺がやるべきなのだが……中々どうして。

「くそっ！早い！」

「一夏！アイツらは密漁船だぞ！？守る必要がどこにある！？」

一夏と箒が喧嘩をしていた。

さっきの密漁船の守るかどうかの話を、今だに引きずっているようだ。

「箒！しゃべる余裕があるなら前向いて敵の動き見てろ！死ぬぞ？」

「貴様とて初めての戦場だろう！？貴様も喋れる余裕があるのか！？」

「ごめん、何度もしたことあるし、全然余裕があるよ。」

「自分のISを貰えて嬉しいんだろうが……それはお前の力じゃないんだぞ！？結局他人に頼って手に入れた力！傲慢になるのは勝手だが、戦いの足を引っ張るようなことはすんな！」

「何おう！」

「っ！バカ野郎！」

箒が俺の言葉にイラついたらしく、無謀にも二刀の刀でシルバリオ・ゴスペルに突撃する。

そのため、俺が無理矢理蹴っ飛ばして敵の容赦ない蹴りを受ける。

「ガハアッ!？」

そのまま、俺は近くの小さな無人島に落ちていった。

「戦人！」

「婿!？」

「戦人君!？」

マドカたちが驚きの表情でこちらを見ている。

俺はそれに何も答えず、ただ落ちていった。

ガゴンツ!!

「ウグツ!？」

落下の衝撃をもちに受けて、息が詰まる。

いってえ……だが、このままだと負けるな。

しょうがない、使いたくはなかったが……最悪死ぬかもしれないな。

パイロットは。

俺はそれを展開して、空に再び飛び立つ。

それを確認したのか、一夏が喜びの声をあげる。

「戦人！無事だったのか!？」

「なんとかな！だけど、ここまでボコられたらもう手加減はできない！流れ弾に気を付けてくれ！死ぬぞ！」

「え？は……ええっ!？」

俺はビームライフルに酷似した、いやビームライフルそのものだが中身は違うものを手にして、シルバリオ・ゴスペルと対峙する。

「死んでも恨まないでくれよ！」

ビームライフル……いや、ドツズライフルを撃った。

左腕に直撃して、砕け散る。

それに動揺したのか、明らかに動きが少しおかしい敵。

ドツズライフル……ガンダムAGE-1の標準武装である、ビームをドリルのように回転させてモビルスーツの装甲を砕くビーム兵器だ。

まあ、原作での敵が通常のビーム攻撃を弾くから元々掘削作業などのために作られた技術を主人公が応用して兵器化させたものだ。

威力が高すぎて、直撃すれば一撃でシールドを削り、そのまま絶対防御を貫いてパイロットを殺してしまうため、今までAGE系の機体

は使わなかったが……逃がしたときの将来を考えるとこれの方がまだ全然いい。

ちなみに、後で知ったがパイロットは暴走する直前に脱出できたり、無事だったようだ。

「当たれ！」

ドツズライフルの砲口が光り、回転するビームが飛び出る。

ビームは左足に当たり、粉碎した。

「動きがお粗末過ぎるな！」

足を破壊されたからか、急に動きが悪くなるシルバリオ・ゴスペル。

さらに撃って右腕、背部のパーツの片側を破壊する。

「一夏！止めを！」

「わかった！ありがとう！」

俺の指示で、一夏が零落白夜を使ってブレードでシルバリオ・ゴスペルを斬り裂く。

「よし！」

「やったあ！」

……ギリギリだった。

俺が胴体をぶち抜いてれば、あっさりと終わるだろうがそれでも動く場合はもはやホラーだし、そもそもこういうのは若いやつにやらせた方が良い。

そう思いながら、俺は一夏たちに帰投するように言って、残骸を見に行った。

そこで見たものは、正直、異様としか言い表せなかった。

「ギギギ……ッ！」

「なんじゃこりゃ……!?!」

残骸の中から、金属で出来たネズミを見つけた。

が、その姿は異様でネズミにしては大きめな上に背中にISコアらしきものが埋められていた。

そして、そもそもの話。

ISの外装の残骸を集めて形を変えて一つの人らしきものになろうとしていた。

「気持ち悪い……」

同行してきたマドカが思わず呟いた。

俺としても気持ち悪い。

「同じくだぜ……」

マドカは、サイレント・ゼフィルスのスターブレイカーをその人型に向けた。

そして、ビームが発射されて粉碎された。

つかこのIS、束さんが強奪してきた物らしい。

開発者は何でもありだね……

破壊されたのを確認して、俺とマドカはそこから離脱した。

「ぶっうっ!?」

この右腕、いや右半身痛みがなければ最高なのだが。

お家に帰るまでが校外学習……デスツ！

臨海学校が終わり、寮に戻ればまた日常の始まり。
俺はバスから降りたとき、そう思っていた……。

「今日から貴方が生徒会長だから、よろしくね！」
「はい？」

楯無さんが、俺の部屋に入ってきて早々に手に持った【おめでとう】と書かれた扇子を見せつけながら、そう言った。

俺は間拔けな声しかでなかった。

「あの、俺、一年生ですよ？それに、大人が生徒会長って……」
「この生徒会長の就任条件は一つ！」

バツ！と、閉じては開いて、扇子に書かれた文字が変わる。

「学園内で最強であること!」

【最強】と書かれた扇子が、手にあった。

どーゆー手品だよ。

「えーと、つまり生徒会長が最強な訳で、そんな楯無さんを倒した俺は現段階で俺が最強?!」

「というわけで、生徒会長の証であるこの腕章をあげるよ!」

「いやー!いらないうす!」

と言ったけれども、無理矢理つけさせられた。

しかも、何故か外れない。

「制服全部に着けておいたから、安心して生徒会長やってね☆」

と言つて、楯無さんは何処かへ去つていった。

取り残された俺は吠えた。

「オデノカラダハボドボドダ?!」

「…戦人大丈夫か?」

「アナダニハワガラナイデシヨウネエ!!」

朝から注目を浴び、そしていつの間にか見知らぬ女子たちが纏わり始め、朝からストレスが溜まりに溜まる。

そのため、ここしばらくオンドウル語になっている。

「声がすげえことになってるぞ……………?」

「大丈夫ではないだろ、これ」

うん、実際大丈夫ではないよ。

「ナンデオデガゼイドガイチョウナンダア！」

「元々、この学園での生徒会長になる条件は最強であることだからな……しようがない」

と、箒。

「オデノカラダハボドボドダ！」

本日二回目です。

「諦めるしかなくてよ?」

と、セシリア。

「オンドウレラウラギツタンデイスカ!」

「いい加減、その聞き取りにくい言葉をやめてくださいまし！」
と、冷静な突っ込み。

まあ、イラついてるけど。

「ナニヲジョウゴニゾンナボド！」

「今の段階で充分に証拠ですわ！」

一時のコントが、漫才コンビが誕生した瞬間だ。

「なあ、戦人……」

「タチバナザンナゼミテルンデス!」

「俺は橘さんじゃねえ！」

「何なのだこの空間は……」

箒が頭を抱えるなか、時間は過ぎ去り昼飯を食う時間になった。

「やつほー、おりむー、あまくん」

「お、のほほんさんこんちわっす」

「ダカラヨ……トマルンジャネエゾ……!」

「なんで死んだ!?!」

「今日はいつもとよりすごいねー♪」

俺は力尽きた。

原因はストレス。

いや、ストレスで生徒会長就任当日に倒れるってどんだけ俺はメンタル弱いんだよ。

我ながらおかしすぎるわ。

ともかく、これにて臨海学校編は終わる………

第三章 楽しい運動会と夏休み

生徒会長は運動会を仕切る合間に世界の暗殺部を
オーバーキルする

「運動会……生徒会長である俺に仕切れと？」

「はい！そういうことです！」

「それじゃ他の人を頼ってね」バタン

扉を閉めて俺は布団に潜り込む。

「モウヤダアアー!!!」

最近では白髪が増えてきた。

とはいえ、何故かかつこよくメツシユになっており、マドカたちが
勿体ないと言って切ることも叶わず。

そして、最近では刺客が多いのである。

一夏は弱いからか、それとも東さんのおかげかどうかは知らない
が、一夏には被害はないようだ。

その代わりみたいなきらみで、俺が集中的に狙われた。

どうやら各国の刺客だったり、女権委員会の息のかかったやつだつ
たりと、多種多様である。

女がとても多くて対応に困った。

町中、トイレ、挙句の果てに寝込みも襲ってくる。

マドカとの行為中にもあったので、マジでキレた。

そんなわけで俺はストレスが溜まりに溜まっている。

そして、それに重なるようにみんなの運動会。

他にも更識妹との和解やらその他もろもろ。

重なり重なって、メツシユな白髪が生まれた。

円形脱毛症にならないだけマシだが。

「戦人様、お食事をお持ちいたしました」

「アリガト……」

このメイド服を着こなして、食事を持ってきたこの美人さん。俺を殺しに来たもしくは誘拐しに来た刺客である。

多くの刺客たちから聞いた情報によると、俺が「赤い彗星」であると推測されているらしい。

まあ、当たりなのだがだったら殺しに来んなって話だわ。

とりあえず、襲いに来た刺客たちは俺は時間をかけてちよuk…ゴホン、優しく説得してこちら側に引き込んだ。

美男美女、美少年美少女とほとんど顔とスタイルがいい人ばかりだった。

割合としては女性がとても多かったが。

そして、全員が孤児やら訳ありやらで感情やその他が激しくないで、与えたらとてもなついたわけだ。ISの力もあるが。

後、俺はホモじゃねえからな!?

今思ったやつ、挙手しやがれ! 楽にしてやる!

閑話休題。

とりあえず、ストレス発散したいので三連休使って各国の暗殺部などを焼き肉にしたいと思います。

「ヨルハヤキニクツシヨオー!!」

「?戦人様、今度へその焼き肉を食べさせてくれるのですか?」

「…また今度デス」

一日目。

まずはアジアを中心に焼き肉にする。

さあ、焼き肉パーティーの始まりだ！

side 中国国家首席の部屋

「き、緊急伝達です！」

「な、何事だ!? アメリカが攻めてきたのか!?」

「いえ、それが……暗部のある基地が消滅しました……」

「な、何だと!？」

突然、部屋に入ってきた軍部の大臣に告げられた内容に驚く少し気の弱そうな初老の男性中国人。

「この映像をご覧ください……」

と首席に見せた映像は驚くべきものだった。

「か、核か隕石でも落ちたのか!？」

「い、いえ、事前に赤い彗星からの警告で避難した一般兵からの話では空中にISが存在しており、暗闇で良くは見えなかったものの、月からのマイクロウェーブによって輝き出した後、砲口からとてつもないほどの大きさのビームが放たれて基地が吹き飛んだと……」

「そ、そんなことを……あの赤い彗星が!？」

「はい、その証拠にこんなものが送りつけられました」

く今度殺しにでも来たら今度は中国が焼き肉になるだろう

赤い

彗星>

「……………もうお終いだあ」

sideインド空軍基地

「何なんだアイツは!？」

「くそー早すぎるーキャッツ!？」

IS部隊が展開されているなか、そのなかに一つ異様に赤だけで構成されたISがあった。

それはビームナイフしか持たず、それでいて紙装甲な割にとっても早く、IS部隊は全く当てられないでいた。

そして、一つ一つと落とされていく。

「キャア!？」ドカーン

「む、無理よあんな化け物!」

こうして、インドの一つの基地が地図から吹き飛んだ。

side韓国のとある秘密基地

「うそ…でしよ?」

秘密基地を作らせた張本人である軍の将軍は、目の前の光景に啞然としていた。

山の奥深くに秘密基地は存在していたのだが、その秘密基地が跡形もなく壊滅していたのである。

それを見ていたその運良く外にいた基地の兵士は、こう伝えた。

「で、でっけえ化け物が、ISがビームをぶっぱしたら基地まで穴が開いて…:ははっ、神様、あれは天罰なのでしょうか?」

この兵士は秘密基地が暗殺のためのスパイ教育の基地であることを知っているための発言だった。

しかし、精神が安定してないので病院に送られた。

「私が…私が何をしたと…?」

五十手前まで生きている彼女だが、全ては国のためだった。

しかし、今回はその忠誠心が仇になった。

「赤い彗星から？」

「はい、メツセージが届いております」

「あまりにも酷かったので、消させてもらった。ザマアW 赤い彗星」

「ああ…ああ…ウソダンドコドン!!」

「将軍ー!?!」

sideロシアの大統領の部屋

「大統領、シベリアの秘密基地が消滅しました……」

「………は？も、もう一度聞かせてくれ」

「…大統領、シベリアの秘密基地が消滅しました……」

「……カミヨ！アナタハナゼワタシヲウラギツタンデイス!?!」

「大統領!?! 医師を！医師を呼べー！大統領の気がおかしくなりましてあー！」

「ブツブツブツ……オンドウレラウラギツタンデイスカ!?!」

「大統領ー!?!」

「まだまだ、赤い彗星のストレス発散は続く……」

焼き肉パーティー ヨーロッパ編

ウム、大体のアジアの基地は吹っ飛ばしたか。
では、次はヨーロッパや！

sideイギリス軍本部のとある一室

「エリナル准将、貴殿に逮捕令状が出ている。即刻、裁判所に出頭してもらおう」

「な、わ、私はあのような化け物を放置できぬから、秘密裏に……！」
「女王は許可は出していないとおっしゃっておられる。ペテン師が」
ラスカ・エリナル准将（38）は、アフリカで起きた紛争にて活躍したISのエースパイロットであった。

しかし、今回、赤い彗星の逆鱗に、いやストレスを溜めさせたため逆襲されたわけである。

尚、彼女が運営していた暗部は韓国の秘密基地で行われていたことよりもかなり酷いものだった。

「私は英雄だぞ?!私を逮捕したら……!」

「国民や世界の人々には貴方がしてきたことが全て赤い彗星殿によって暴露されている。諦めて出頭するのだな」

と言って、警察は出ていった。

「ウソウソウソウソ……!?!」

嘘だと願い、テレビをつける。

そこには、彼女のやってきた非道と老若関係なく、男に対する余りにも酷すぎる対応の一部始終がニュースで写し出されていた。

ニュースに出ているゲストは、彼女がとても重い有罪が下されるだろうと話していた。

「アアアア……アアア……ナニヲジョウゴニゾンナゴド!?!」

この日から彼女は奇声しか上げない壊れた人間になった。

sideフランスのとあるニュース番組

「み、見てください！あのIS！正体不明のISが先程からIS部隊を相手に無双しております！」

現場のニュースアナウンサーが興奮気味で、現状を伝えている。

謎の赤一色に染められたISは、フランス軍のとある基地にあの細い砲身からは考えられないほどの極太ビームが、基地に直撃して吹き飛ばしていた。

そして、破壊しきれなかった基地の部分からIS部隊が展開しており、元々は白かったのだろう赤い翼をはためかせながら、斬って撃ち落としていた。

「一体何故あんな事をしたのか、まだ調査中というのが今の段階で明らかになっていく事ですよ？」

「はい、特にこれと言った特徴のない基地なのですが、彼……赤い彗星からのメッセージによれば、非道の限りをつくして製造している暗部の基地を滅したただけだと、ありました」

この番組を見ていた、ちょうどその時は休暇中だった基地の司令官は、すぐに身を隠すための準備を始める。

しかし、それが叶うことはなかった。

「……………」バタン！

「な、なんだ貴様は!？」

「お前にはもう用はない。責任を取って死んでくれ」バン！バン！バン！

「ガッ!」バタリ

「赤い彗星……復讐の機会をくれて、ありがとうございます……」

黒帽子に黒のロングコートを着こなす、子供でもいそうな年齢の男は、そう呟いてこの場から去った。

sideドイツの基地の司令塔

「司令官殿！お早く！」

「いや、ワシはいかん。いつのまにか暗部など作らせてしまったワシの全責任じゃ。お主らはまだ若い。家族もいるだろう?」

「し、しかし!」

「行け! 忠義に溢れた君達と出会えたことをワシは誇りに思い、感謝する! これ以上はワシに付き合うことはない!」

「ぐっ……申し訳ありません! 大將軍! 今までありがとうございます!」

部下であつた彼女は、みつともなく泣きながら基地から脱出していった。

残つた大將軍(?)と問題の犯罪者共が、この司令塔にいた。

「ヒトラークソセイギナノデアル!!」

「ナヂズバンザイツ!!」

「シヨウグン! ハナシアエバナヂズノヨザガワガリマズ!! ダガラゴノナワヲドイデグダザイ!」

「うるさい! 黙れ! 貴様らもろともここで死ぬ! それでいい!」

「………本当に良いのですか? 貴方には責任なぞありませんが」(池田秀一声)

「良いんだ、赤い彗星。これでいい」

「了解した」

その直後、一人の老人と多数の狂人が光に飲まれ、焼き尽くされた。

sideスウェーデンのとある教会の基地

「今こそ! 我々プロテスタントが正しいことを世界中に教え込んでやるのだ!!」

『うおおおおおー!!』

「そのために、我々上層部は邪魔になる存在を消すために、すでに暗殺者を複数送り込んでいる! 特に赤い彗星! あやつの素顔についての情報を我々はすでに持っている! まずはあるの……」

「お楽しみのところ悪いけど、フォントルピードが飛びかようよ」

『はっ..』

……その後、過激な宗教団体は謎の死を遂げるようになるのだがそれはまた別の話……

sideイタリアの首相官邸

「ま、マリオ首相！大変です！」

「何が起きたのかね？」

至ってクールな感じの外見お兄さん、中身おっさんの童顔首相が慌てて入ってきた初老の大臣に聞き返す。

「そ、それが国中の小麦の生産地及びそれに関係する工場などが破壊されました！」

「ナンドッテ…!?!」

実はこの人、ピッツアをこよなく愛するピザが恋人な人なのである。

そのため、ピッツアが食べれない＝死と同じであると言える人なのである。

「ナゼソンナゴドラ?!」

「しゅ、首相?!……あ、赤い彗星から秘密裏にこんなメッセーヅが送りつけられました……」

＜今度やったら二度とピッツアが来なくなるようにするからよろしく

赤い彗星＞

「アビゲイルヲヨビダゼ！アイツヲゾツゴグジヨバツズルツ!!」

「ま、マリオ首相……」

あまりのピッツアへの愛に、普段は流していたこの初老の大臣は今久しぶりにドン引きした。

(この人、首相やってたらあかんやつや！)

まだまだ続く……

焼き肉パーティー アフリカ・南アメリカ・北アメリカ
編

さて、そろそろ終わりかな？
最後の仕事や！

side アメリカ ホワイトハウス

「何だ?!?それは本当か!?!」

「どうしたのです?大統領?」

「……………すぐに【彗星落とし作戦】を中止しろ。でなければ、ホワイトハウスが吹っ飛ぶ」

「つ!!りよ、了解しました!ただちに!」

大統領は震えていた。

人生でめったにないことではないだろうか?

世界中に完全に秘匿している秘密の研究所を破壊すると脅されるのは。

これがただの一般人なら暗殺なり、戯れ言と流せば良かったのだが相手は赤い彗星。

事実を言っているのだろう。

「ワダジバドヴズレバイインダア?」

side メキシコのとある郊外

「なあ、ジエイブ、今日は何もなかったな」

「そうだな、ボブ。ったく、マフィアの護衛つてのはつまらんね」

「ま、俺達が大騒ぎしなきゃこうならなかったがな」

彼らは酒を飲みすぎて、しばらくマフィアの秘密の拠点から外に出されている、元アメリカ兵士である。

まだ若干酒が入っているが、頭の中は極めて冷静である。

彼らを外に出した上司は、ナイスな判断だったろう。

そして、その上司は不運だった。

「おい、ジエイブ」

「ん？なんだ？」

「拠点がある場所ら辺がなんか光ってるぞ？」

「急いで行くぞ！」

彼等が着いたときには、すでに夜は明け、マフィアの拠点は消滅していた。

まるで隕石によってえぐられたかのように。

「なあ、ジエイブ」

「なんだ？ボブ」

「俺達は今日から真面目に生きようぜ」

「俺もそう思ったぜ、ボブ」

side南アフリカ共和国のとある基地

「貴様が俺にちよつかいをかけてきた愚者であるかな？」

と、赤い装甲を持ったIS：赤い彗星は手に持ったヒートホークを基地の司令に向ける。

「は？え？わ、ワタシは違うわよ!?ワタシは…」

「うるさいからとりあえず、眠つとけ」ゴンツ

ヒートホークの柄でおネエの司令官を気絶させて、ぽいっと瓦礫の上に放り投げる。

その基地は、地図から消えることはなかったが、しばらく復興作業が主だったの言うまでもない。

sideブラジル とある地下基地

爆発や銃弾が飛びかよう中、二人の男が避難していた。

片方は足を怪我し、片方はそれを支えていた。

「クソツ！ジャブロー（仮）がこんなにも早く見つかるなんて！」

「そんなことを言ってる場合か、ジェイコブ！さっさと逃げないとI Sの邪魔だぜ!？」

「というか、何で俺達こんなところにいるんだっけ？」

「バカか!?俺達はこのジャブロー（仮）の建築に政府直々に雇われて、建築してる最中だよ！」

「ああ、そうだったな、ブラザー……」ガクツ

「ジェイコブ!?!…ヒツ!?!」

ブラザーと呼ばれた男は悲鳴をあげる。

何故なら、ジェイコブの下半身は無くなって、内臓が垂れ流しにされてきたのだ。

そして、その彼も突如としてビームにさらされて消滅した。

ようやく、終わったあ！

んじや、学園に戻るカア。

にしても、なんかオカシイ感じがする。

なんか違和感シカシナイけど、なんかそんなのはナイというか……
混乱してきた。

とりあえず、戻ろう。

「ああー、ナンカだるいなあ。怠惰ダワ」

「おい、千冬姉にアレをくらわせられるぞ……?」

「何がくらわせるだつて?」バゴンツ

「うげっ!?」ゴギッ

オヤオヤ、千冬先生が何時ものように一夏に出血簿を叩き込んで
ル。

「おい、戦人」

「ン?なんだ?」

「学園が終わった後であの場所に来てほしい」ボソツ

「ん……リョーカイ。でも、行けたらダナ」ボソツ

「?何の話をしてんだ?」

一夏は頭に?を浮かべてそんな感じでこちらを見ていたが……

朴念仁スギルよ、やっぱ。

体育祭、開幕！

世界が騒然になって数カ月たった。

今だ被害を受けた地域は、復興しきっておらず、そもそも何で辺鄙な基地を狙ったのかと調べ始めるジャーナリストや情報屋がそれらの基地に関して調べ始め、世界に暴露され始めている。

アメリカの秘密の研究所に関しては、全くといって良いほどないが。

まあ、あんな所にあるのだから異変に解るわけもないか。

さて、授業が終わったあと千冬先生に呼ばれていたので、あの場所…千冬先生が好んでよく行くバーに向かう。

山田先生も一緒にいる時もあるが、今回はいないかな？

ともかく、バーに着くと既に千冬先生…いや、千冬さんがいた。

「待たせてしまいマシタか？」

「いや、大丈夫だ」

椅子に座って彼女に近づくと既に酔っていることが解った。

「…何か話があるノデは？」

「ああ、ある。だが、ここではない」

「？」

彼女に引き寄せられるまま歩いていくと、何だか予想がついた。

というか、既にこの場所にきた時点で何となく察したよ。

「アノー千冬さん？」

「行くぞ」

なんか、すごいことが起きそうな予感。

それと一緒にヤバくないかそれ!?とも思っているが、もしアレなら俺としても満更ではないし、既にマドカはハーレムを公認している。

俺としてはそれでいいのかと思うのだが、結局流されている上にできている状態で俺が何を言っても説得力はないだろう。

もはや、諦めの領域である。

指定された部屋に着くと、千冬さんは俺をベットのの上に押し倒してきた。

「その…私はこういうのには疎いから…リードしてくれと……」

「…千冬サン。本当に良いんでスカ？俺なんかで」

「私は……私は私より強い人ならと思っている。それに、今こうしている時点で覚悟は決めている」

「……解りマシた……」

なんやかんやで流されやすいんだよな。

俺も千冬も恋愛に関しては。

次の日、起きてからもヤつてしまい、二人共々遅刻して叱られたの
は言うまでもない。

そして遂に体育祭が始まった。

競技は色々とあるが、ほとんど完全に俺や一夏を狙っている。

俺としてはもうこれ以上は関係を広めたくないのだが。

というか、男は百メートル走るだけだからやることねえ。

体育祭は無事に終わった。

ほとんどハプニングしかないが、なんとか事故もなく終わった。

次は文化祭かあ……。

夏休みに入るから、しばらく考えなくとも大丈夫だが、夏休みどうしよう。

「旅行でもしないか？」

「え？」

マドカから突如として言われた。

「それいいね！」

「旅行か…興味はある」

シャルは賛成でラウラも賛成のようだ。

そして、新たな要員である千冬さんも賛成の模様。

「戦人なら私達の分まで払えるだろう？」

「…解ったけど、どこ行くんだ？それに、シャルはお義父さんとの決着は着いたのか？」

そう、シャルは少し前まで一度本国に戻って父親と話し合っている。

これはこれが半分脅したのもあるが、彼も話したかったようで行かせたのである。

「うん、ちゃんと着けてきたよ。まあ、僕が考えていた事よりも全然そこまで重くはなかったけどね」

「何て言われた？あ、言いたくないなら良いけど」

「……謝ったよ。お父さん。そして、戦人と一緒に幸せになつてくれって」

「……色々と照れるなそれ……」

「後、もし僕に何かあったら何がなんでも殴りに行くって」

「そりやどうも……」

でもまあ、良かった。

ちゃんと和解してくれて。

「んじや、とりあえず定番の京都にでも行きますか!」

「おー!」

「……京都ってどこだ?」

「…意外と我が妹も兄に似ているのか…」

ラウラとシャルは喜び、マドカはそもそも京都を知らない。

そして、その様子のマドカにため息を吐いてしまう千冬という、なんとも言えない図が完成していた。

旅行当日、俺は自分の所持金額を改めて見て、腰を抜かしてしまった。

しばらく、見てなかったのが銀行に預けるだけ預けていたのだが改めてみたら一兆行きそうだった。

「こんなに稼げてしまつて良かったのだろうか?」

「まあ、僕たちが旅行するには良いじゃない?」

ええい、ままよ!

京都旅行……（ 四、一一一）

新幹線に乗った俺達は京都で何をするのか、とても楽しみにしていた。

が、その楽しみも京都に着いてからの翌日、そんなものはぶつとんでしまう事件が起きた。

「い、隕石いいいいー!?」

『え? 『は?』』

そう、隕石がこの地球にやって来ているのである。

既に核ミサイルなどで迎撃したらしいが、効果なし。

まず、大きすぎるのこと。

「マジかよ。人類滅亡三分前かよ」

せつかくの京都旅行が台無しだ。

「ど、どうにかできないのか?」

「織斑一夏、君はただのIS一機で隕石を押し返せるとでも?」

「う……」

「だが、手段が無いわけではないんだらう?」

おや、千冬は気付いたようだ。

「ああ、禁断の兵器シリーズを使う」

『禁断の…兵器シリーズ?』

「まあ、俺が勝手に纏めて呼んでるだけだけど、実際禁断と言っても過言じゃない兵器が俺のISの中にはあるんだ」

俺は一つずつ、説明していく。

「まず、サテライトキャノン。月から送られるマイクロウェーブでエネルギーを充填して、射線にあるものを一掃するビーム兵器。さらに、これの発展でツインサテライトキャノンがあるし、威力も巨大なスペースコロニーも一撃で破壊できる」

「マジかよ……」

「ただ、これが外れたらマイクロウェーブをまた受け取らなければならぬから、時間ロスを見逃せないから二射目で仕留められなければ、今度はツインバスターライフルだ」

「そつちも……スペースコロニーとやらを一撃で破壊できるのだろうか？」

その千冬の問いに、俺は首を縦に振る。

「だが、かなり大きめな隕石が地球に近づいてきているんだ。このビーム兵器じゃ破碎しきれないかもしれない。だから、直接押し返す手段もある」

「押し返す？ さつき、それは無理だって……」

「それが普通のISならば、ということだろうか？」

「そうだ、マドカ。ただ、その場合俺はどうなるか解らない」

『な!?!』

「まさか……死ぬってわけじゃないよな!?!」

「それ含めて解らないんだ。俺が知る限りの知識でも、サイコフレームのオーバードを引き起こして地球に落ちる隕石を押し返した人は行方不明になってるし……」

「そもそも、どうやって宇宙に行くか、だな」

と、マドカの発言に一同が黙る。

「……どうするんですの?」

「一応、宛はある」

「……私の姉ですか」

そう、篠ノ之束。

この天災の協力があれば、俺を宇宙に送ることは可能だろう。

……手段がどうあれ。

「どちらにせよ、死にたくないなら何かせんと」

「ハイ！ こういうときの束さんだよ♪」

なんか来た。

「少し頭を整理させてくれ……」

少し頭を冷やして整理した。

で、結論。

「力を貸していただけませんか？」

「いーよー！その代わりに、ちよつとだけその体調べさせて」

「まあ、解剖とかじゃなければ」

「オツケー！んじゃあ、このポッドに乗ってくれるかな？」

『え？』

そこにあるのは人參にウサ耳を着けたなんとも言えない人型の口ポットだった。

そして、扉が開いて俺を入れようとしている。

「ちよえ！？」バタンツ

「んじゃ！種子島に行ってくるね！★」

俺の視覚的には、ガシヤンガシヤンと歩く音しか解らなくて、視界は真っ暗。

で、数分か数十分。

音が鳴りやみ、扉が開いた。

そして俺は眩しさに目をやられた。

「止まるんじゃねえぞ……！」バタン

「ちよ、急にどうしたの戦人君!？」

ありや、意外にもアワアワと慌てる束さん。

「ハハッ！ちよつと目がやられただけだから大丈夫だ」

「ふう……赤い彗星が死んだなんて、認めたくないしね！次は止めてよね！」

とまあ、コントは終わりにして。

種子島のロケット発射台を占拠してしまった東さん。

ちようど、シャトルを打ち上げる予定だったのか、それとも謎技術で出したのか。

「んじや、シャトルに乗ってね」(o^v^o)

「りよーかい」

シャトルに乗り込み、ガンダムDXを身にまとう。

ガンダムXならともかく、DXかあ…

まあ、人殺しに使わないだけまだマシか。

「発射〜！♪」

「え？」

なんか急に打ち上げられた。

「ぬうおおおおおおおー！??」(蛇声)

宇宙、それはモビルスーツの故郷であり、ISの本来の存在意義の場所だ。

「無重力空間……めっちゃ動きにくい！」

思わず文句を言ってしまうが、ISを纏うので問題ないか。

試しにIS解除したけど、ちゃんと空気はあるし、まあ大丈夫だった。

「さて、仕事に取り掛かるか」

俺は船外に出た。

勿論ISを纏ってね？

「うっはー……形はアクシズみたいだなあ」

何の因果なのか、形はアクシズに似ていた。

「……マイクロウェーブ、来い！」

DXのツインサテライトキャノンの発射準備が行われる。

そして、月からマイクロウェーブ。

エネルギー充填100%。あとは照準を合わせるだけだ。

「外れるなよ……！」

照準がロックされた。

俺は撃った。

「ぶっ壊れるー！」

サテライトキャノンのビームはしっかり巨大な隕石に直撃させた。だが、一部を破砕しただけでまだ隕石は依然としてこちらに向かつてくる。

助かった面で言えば、スピードが多少は落ちたことか。

「ちっ！ゼロで今度こそ……！」

ウイングガンダムゼロに切り替えて、ツインバスターライフルを構える。

最大出力までチャージして、俺はトリガーを引く。

命中したが、やはりこちらからみて左の部分を破壊しただけになった。

ちよつと銃身がぶれたか。

「EWで打ち切りだぜ……！」

ガンダムXのサテライトキャノンを撃っても良いのだが、ツインサテライトキャノンで多少の時間稼ぎだ。

だったらEWのツインバスターライフルをやった方がまだ可能性はある。

とはいえ、ツインサテライトキャノンの方が多分威力は上なんだろうが。

「終われええー！！！」

ーアメリカの軍事本部にてー

「何だ!? 宇宙にIS反応だと!?!」

「人工衛星からの映像、映します！」

彼らが見たのは、一機のISが大きめのライフルから極大のビームが放たれた所だ。

「あ、あのISは何処の機体だ!？」

「ど、何処にも所属してないようですよ！ま、まさか例の……?」

「赤い彗星……か？だが、赤い塗装はされていないようだが……」

「赤い彗星だよ！彼は」

突如として通信が開き、その人物に驚く二人。

「た、束博士!?!何故急に!?!」

「一応念のために攻撃されないように、伝えようとね？」

「あ、赤い彗星……彼ということは赤い彗星は男なのか!?!」

「それは想像に任せるね。でも、少なくとも彼は地球を救おうと、必死に使える手段を使ってるよ」

ちなみに、束によって今映し出されている映像は全世界に公開されてしまっていたりする。

そして、その映像を見たISの操縦者たちは無茶ぶりを言い始める。

「おい！私たちにも宇宙に行かせる！アイツだけにやらせるわけにはいかねえだろ！」

「無茶いうな！そもそもISだとはいえ、大気圏に再突入したら耐えきれられるか……」

「何もしないよりマシでしょ!！」

とまあ、こんな感じに。

場所によつては、暴動が起き、ロケット発射台が占拠されて宇宙に強行する人達も現れた。

虹の彼方からやって来た男

ゼロ（EW）のツインバスターライフルも撃ったが、破壊しきれなかった。

「畜生が！サイサリス！」

なけなしの核弾頭。

「アクシズ（に似た隕石）よー…ここで散れええ！（お願いマジで）」

だが、直撃するも上の部分が吹っ飛んだだけで、本体自体はやって来る。

もう、やるしかないのかと考えているとレーダーにIS反応が多数。

「なっ!？」

そのISたちは、ミサイルやビームを隕石に向けて撃つが、やはりほとんど効果なし。

「止めろ！そんな無茶なことすんな！」

俺はオープンで話しかけるが、相手は聞かずに隕石に取り付く。

既に大気圏を突入しかけている。

「赤い彗星だけに、やらせないよ！」

「どうせダメなら最後まで抗おうってね！」

「おいおい……」

呆れるが、この人数ならサイコフレームのオーバーロードに期待できるかもしれない。

まあ、俺が生還できる確率は高くして七割、低くて三割だ。

「やるだけやるか……ユニコーン！」

俺はユニコーンガンダムを纏い、さらに重ね着するようにとあるものを呼び出す。

「ネオジオング！」

そう、赤い彗星の再来の代名詞（？）ネオジオング。

ナラティブと合体してたのだから、ユニコーンとも合体できるだろう。

今はとにかくサイコフレームが欲しい。

使えるものは何でも使おう。

「サイコシャード、展開！」

光輝く輪っかが展開され、脚部のプロペラントスラスターが火を吹く。

隕石にマニピュレーターに値する大きな腕を、隕石にぶつける。

合体を解除して、ユニコーンガンダムのNT-Dを起動させる。

「ユニコオオオオーン!!!」

機体の一部が赤く染まり、赤い燐光が俺を包む。

そして、増加したスラスターから火を噴かして押し戻そうと踏ん張る。

ここまでで隕石は本格的に大気圏を突入し始めている。

大気摩擦で、機体の表面温度が上がリ、一部のISは推進剤切れか、逆シャアのギラ・ドーガのようにゴロンゴロンと転がっていく。

「ユニコーン！俺の想いに、応えてくれええー!!」

頼む、地上には大事な人達が、大事な仲間がいるんだ!!

ここで押し返せなきゃ……………!!

《君のその願い、聞き届けた!》

「何だ!?!」

突如として、頭の中に響き渡る声。

そして、隣に巨大な、原寸大らしきガンダムタイプがサイコフレームの輝きを纏いながら、押し返す。

いつの間にか、辺り一面は虹色の輝きで満ちた。

「サイコフレームのオーバーロード……………これが……………!!」

その日、人類は奇跡を目の当たりにした。

虹色の光が地球を一周して包み込み、脱落したISや押し返していたISたちも傷一つなく、地上に戻ってきた。

だが、肝心の赤い彗星の確認はされず、そして、東たちにもその行方解らなかつた。

だがしかし、1つのISが大気圏を突入し、IS学園へと落ちる。
まるで、運命に誘われたかのように……

第四章 呼ばれた男 俺！参上！

sideマドカ

あれから一週間、彼は戻ってきていない。

京都から戻り、一人寮の部屋で寝たり食べたりすることが多くなっ
た。

夏休みはまだあるというのに、私は他にすることがない。

千冬姉さんや一夏兄さんも、彼のことは心配しているし、一番心配
しているのはやはり彼を愛しているシャルやラウラだろう。

まあ、私もとても心配なのだが。

「……………どこに言ったんだ、戦人…」

そう呟いた矢先。

ストオーン!!

「何だ!?!」

「何事!?!」

生徒：クラスメイトたちが騒ぐのを余所に、私は窓に視線を向け
る。

敵の攻撃ならば、ISを展開して迎え撃つ……と、思っていたのだ
が警報は鳴らない。

そして、よくよく見れば何かが墜落してきたかのように、IS学園
の校庭に一筋の抉れた後がある。

私はまさかと思って、教室を飛び出し千冬姉さんの制止の声を振り
切って向かった。

向かった先には、一つの若干ひしゃげた球体のものがあった。
しかし、その球体には既視感があったがどこで見たか忘れてしま
い、悩む。

が、今はあれが何なのか調べなくては。

もしかしたら、戦人である可能性もありえる！

そう思い、私は球体の周りを探すとどうやら開きそうな扉のような
ものがあつたので、ISを展開してこじ開けた。

そして、そこには見覚えのない一人の男が椅子のような物に座って
眠っていた。

s i d e
????

俺は……どこにいる？

見知らぬ天井なのだが。

いや、まさか鉄血世界で言うことになるとは思わなかった……て、

あーそっか。

ここは違うところだったな。

だが、ここはなんの世界なのか全然見当がつかん。

とりあえず、周りを調べんと……

「いつつつ……」

痛い。

筋肉痛かな？

ともかく、ここは何処なのか調べないと話にならない。

連邦軍とかだったら……いや、連邦軍って二つあるからメンドイ……だって、A G Eと宇宙世紀で連邦軍っていう軍の名前があるんだぜ!?

結構解りにくいと思うんだが!?

と、脳内でA G Eのスタッフその他に文句を言っていると誰かが部屋に入ってきた。

「起きたか。早速だが、お前は何処の国からやって来た?」

「え? 国? 地球とか火星とかではなく?」

「何故、出身地で火星が出てくる……」

目の前にいる女性は、少なくとも俺が人生で出会ってきた女性の中でトップ3上位に入るほどの美人である。

まあ、俺としては暫定というのが入るが。

だって、個人的な物だし。

そもそもそういうの1々考えたくねえ! メンドイ!

可愛いなら可愛いで、綺麗なら綺麗!

それだけだぜ! (作者も同意見でございますよ)

「あー、俺は一応日本? 出身にはなる……かもだけど、それは俺の前世の話だしなあ」ブツブツ

「なんの話をしている?」

「いや、何でもない。こちらの話だ。それで、とりあえず今の暦を教えてくださいるか?」

「何を言っている?……西暦だが」

「……西暦? ダブルオー? いや、医療設備が現代過ぎるぜ?」途中からブツブツ

「……はあ。お前は何者だ」

何だかあきらまれたよ。

まあ、それでも良いのだが。

「今の俺は鉄華団所属、モビルスーツ部隊隊長をやらせてもらってるよ。あ、名前は禍月桐谷だ」

「鉄華団？モビルスーツ？何だそれは？」

「あー、やっぱり知らんか……ってヴェー！」

俺はガンダムという言葉に聞き覚えはないかと聞くが、彼女はないという（まあ、千冬さんはYOUTUBEみたいな動画はあんまし見ないからね。そして、仕事で忙しい）。

つまり、ここは……

「現代……だとお!?」

「……（コイツは麻薬で頭が逝ってしまった人間なのか??）」

と、さりげなく俺の事を中二病扱いしたその人！

俺は中二病じゃねえ!!

結局、情報のすり合わせを試みたところ、一応俺が知っていた世界だった。

IS……インフィニットストラトスの世界である。

透火に殴られ蹴られの後は、異世界転移ですか!?

あの黒ジャージ少年のように叫びたくなるわ！

「貴様は……あの事件に関係しているのか?」

「…………多分そうだと思う。記憶が曖昧だから、正確には解らないが……あれはアクシズショックと同じ光だ」

「……アクシズショック？」

「……フム。一旦、君の好意を向けている相手のためにも、君と親しい関係の人達を集めてくれないか？こちらもできる限り、情報を提供する」

こうして、俺は束の間の異世界転移生活を送ることになった。

だがしかし、災厄の時は近い……何故かそう感じた。

宇宙に一人佇む男がいた。

その男は、かつて大切な人を守るために負った右半身の傷痕を禍々しい光をおびながら、時が来るまで待ち続ける。

あの星を、人類にとって母なる水の星に住む汚物を粛清するために

⋮

大地の復讐鬼は空を駆ける

「なるほど。隕石…ねえ」

俺は彼女たちの話を聞いて、この世界の事や俺を呼んだ彼の事を知ったが、依然彼の行方は解らない。

「…………可能性としては、今だ宇宙で気絶しているか、大気圏の摩擦熱で燃え尽きたか」

「ふ、不吉なことを言うな！」

「確かに不吉な事だが…………ラウラちゃん、この事件はかなり危険だぜ」
『事件?』

「あくまで俺の予測というか勘だが、誰かが隕石を落とし、そしてその何者かが彼を蝕み、そして何かをしている」

「勘にしてはやけに明確だな」

「人類の革新だとか言われたニュータイプ様だからね。別に誇張するわけじゃないが、俺の勘は当たる方だよ」

とりあえず、俺には戸籍も何もないので編入試験を受けることになった。

俺としてもいつまでここで世話になるか解らないが、少なくとも一人で宛もなく生きるよりはマシだろう。

ただ、情報の関係上三人目の男性操縦士として情報公開が行われるようだ。

まあ、この世界に来てしまったのでそれくらいはしなければダメかなとは思う。

で、編入試験。

何処からか情報が漏れたのか、生徒やら何やら嫌な気配を漂わせる人間たちがアリーナに集まっていた。

「すまないな。本当ならもう少し静かにやりたかったのだが」

「いえ、別に構いませんよ。漏れてしまった物は仕方がないですし」

俺のISはかつて俺が愛機として乗っていたモビルスーツたち。

どうやら彼もまた同じようにその場で機体変更が可能らしい。まあ、使える機体はこっちの方が少ないが。

今回使うISはアベンジャーガンダムとNEO・Hi-ルガンダム。

まあ、小手調べな感じでアベンジャーガンダムだが。

カタパルトに足を乗せる。

「禍月桐谷、アベンジャーガンダム。出るぞー！」

イサリビのカタパルトとも、連邦の戦艦からの発進とも違うGが俺の体に負荷をかける。

「さて、試験の相手をよろしくお願いします。千冬さん」

「陸戦タイプとは……………舐められたものだな」

「舐めてはいませんよ。でも、どの程度なのか知りたくてね」

「フツ……………小手調べという訳か」

俺も彼女も一定の距離を開けたまま、数分。

彼女のプレッシャーと俺のプレッシャーが、ぶつかり合う。

そして、先に動いたのは……………

「埒があかない。やるしかないか」

俺だ。

マシンガンをブツパ。

それに対応して彼女は回避と弾丸を斬る行為を繰り返す。

そして、確実に近付いてきている。

「弾を斬るのかよ……」

「そちらも中々近付けさせてくれないだろう…っ」

一見すると俺が押されているが、実際のところはどちらも互角。
まあ、機体性能のおかげか？

「バズーカ！」

バズーカを呼び出し、発射。

しかし、避けられては斬られた。

だが、爆風によるダメージは少しぐらい入っているだろう。

「ちっ！」

「グッ!？」

彼女はマシンガンを撃ってきた。

もちろん、持ち前の経験則と勘で回避するがいくつか当たった。

「まだまだ！」

「はあっ！」

今度はビームサーベルを抜刀して、相手の刀と打ち合う。

しかし、決着はまだ着かない。

「はあはあ、やるな…！」

「そちらこそ、強いじゃねえか」

息が少し切れる。

体を丸ごと動かして機体を動かすって、座乗式のモビルスーツに乗ってきた俺としては慣れないの一言。

元が女性専用の兵器なためか、それとも性能差と技量の差があるからか。

詳しいことは今のところよくわからないが、少なくともアベンジャーガンダムのままでは負ける。

「ならば、コイツを使うまで…！」

「っ!!」

俺はNEO・Hiiragganダムに機体変更した。

会場はそれほど驚かないが、それでもかつて見たことのある機体に似ている上に彼もまた機体変更が使えたのだ。

若干は驚いた人が多い。

「姿を変えたということとは、それが本気か」

「まあ、ある意味な。そちらも本気にならないと、死ぬぜえ！」

ビームライフルを連射する。

回避されるが、そこにバズーカ。

「ちっ」

バズーカの弾を斬ろうとするが、それは悪手。

何故ならそれは散弾なのだから。

「があっ!?!」

会場にいる人間たちが驚く。

初めて、明確なダメージを千冬に与えたのだから。

あの織斑千冬に。

「これがISの力……モビルスーツよりの劣化版に近いが、ある意味モビルスーツより驚異的なだな」

「やるじゃないか、禍月桐谷」

「久しぶりに互角に戦える相手と出会えて嬉しいんだろ。俺も嬉しいよ。まあ、俺が勝つが」

と言って俺はシールド裏にあるビームキャノンを使う。

「当たりはしない!」

避けられた。

「行くぞ、ファンネル!」

サザビーのファンネルを展開する。

「ビット兵器…!?!」

「フィン・ファンネル!」

ファンネルを全て展開する。

この世界ではファンネル系統の兵器はブルーティアーズと呼ばれるシリーズが元祖のようだが、あれは見させてもらったがビット兵器に高い適正を持つていながら、静止しているのが多い。

セシリアの場合、それは克服しているようだがまだ動きに迷いや鈍さがある。

そこら辺を考えると、宇宙世紀などのガンダムシリーズのファンネル系統の兵器が一枚上手だ。

そして、俺のNEO・Hiilガンダムはファンネル搭載数はモビルスーツサイズでは最多に入る。

「全て捌ききれるかな？」

「クッ！」

ファンネルによる、オールレンジ攻撃。

これによって、千冬とシノカミの戦いは決着が着いた。

女権委員会の強襲

試験から数週間後。

何気に学園になれた俺は、頭を悩ませていた。

それは女権委員会の迷惑メールや電話だ。

無駄にうるさいんだよ………ギャーギャーわめきやがって！

発情期の犬ですかコノヤロー！

しかし、そんな冗談も言つてられないほどの事件が起こるとは俺は思わなかった。

IS学園に通い始めて数日。

何だかんだでISの知識はそれなりについてきたが、これは俺にとって本当に必要なものだろうか？

元々、俺は肉体的にはガンダム世界の住人。

転生者といえど、いつまでもこの世界にいるのかはよくわからない。

しかも、俺はガンダムに乗ってたし……

彼の顔写真は彼のハーレム要員である、シャルロットやラウラ、マ

ドカから見せてもらい、聞いている。

いや、ハーレムって……羨ましいなオイ！

とまあ、呑気に俺は考えながらアリーナでI Sに慣れるために、アベンジャーガンダムで練習していると……

「マジかつー！」

突然、殺意が俺を襲う。

そして、避けるとそこにはレーザー兵器の弾が。

「一人、二人までならともかく……二人まで来るなら我らには我慢が
できん！禍月桐谷！貴様を殺す！」

なんとも理不尽な理由で俺を殺しに来た女権委員会の方々。

こりゃ、SEEDみたいな腐り方をするな。

「くらげっ!？」

俺はビームライフルを直撃させる。

「……殺すと言ったんだから、殺されても文句いうなよ……？」

俺は元々、というか最初からこの世界の住人ではない。

彼と呼ばれて助けに来ただけの存在だ。

いずれは世界によって、元の世界に引き戻されるのではと考察して
いる。

だからこそ、最初に撃たれたときは殺すつもりはなかった。

しかし、彼女たちは宣言した。

俺を殺すと。

「……墜ちろー！」

「がつ!？」

キャノン砲を出現させて、彼女たちからしたらしっかり回避運動し
ている回避中の敵に直撃させる。

「撃つなら撃たれる覚悟もしろ……本当に良い言葉だよ！」

ビームライフルで、体勢を立て直そうとする先程の敵の脚部を破壊
して、もう一度直撃させてシールドエネルギーを削りきる。

「キャツ!？」

あっさりとやられた女は、啞然とする。

「そんなに呆けている時間があるなら逃げれば良いのにな？」

俺は戦場で叩き上げられた。

だから、最初は不安も多くそして殺すことにも若干躊躇していた。敵に撃たれていると何故か撃つても何も感じない俺に、恐怖していた。

だが、それも昔の話。

ちゃんと踏ん切りをつけて、戦場で多くの戦果をあげた。だからこそ、俺はコイツらに怒りを覚える。

「自惚れた糞共め……………」

マルチバルカンで、散弾を逃げようとする彼女に当てる。骨ごと砕かれ、血肉が撒き散らされる。

「ひっ…!?!」

「何だ？ビビっている場合か？呑気なものだな」

戦場でビビるやつほど、死ぬ。

ヤザンが言っていたセリフだっけ。

「いやああああ」ドンツ

シールドエネルギーが尽きた敵を確殺するため、180mmキャノン砲をぶち当てる。

体がバラバラになり、血飛沫がさらに撒き散らされる。

しかし、この異常事態に先生方も何かしらの対応はするはずだが……………多分、これは秘密裏かつ仕組まれているものだな。

「……………なら、生かしておけば物量で負けるか」

どうせ出られないようにされているだろうし、ここから移動するのもダルいのでここで遊びで殺りにきた敵を殺すか。

「さあ、こいよ」

俺のプレッシャーに全員が絶望した感情を感じたのは気のせいだろうか？

俺はどんどんとやって来る女性兵士やらIS搭乗者を殺戮していく。

「オラオラアアアー！遊びで殺りにきたんなら、さっさと尻尾巻いて逃げろやあ!?!」

「いやあ!?!」ダダダダダン

俺はNEO・ヒーレガンダムに換装していた。

アベンジャーガンダムはエネルギー、弾薬含めて尽き、ソレデリアはどちらかというと砲撃戦に向いている機体なのでヒーレガンダムがダメになった時の予備。

腕のガトリング砲で敵を撃ち殺し、シールド裏にあるミサイルで敵のシールドエネルギーを削る。

「くあつ!?!」

「死ね」ドシユウ

「や」シユウウン

「ひ、ヒィィィー!?!」

既にアリーナの中は血の海だ。

パツと見、赤くない場所なんてないように見える。

敵は生身になっても、呆れるか手持ちのピストルとかで、攻撃するから圧殺したり撃ち殺したり斬り殺したり。

最早凄惨としか言いようがない。

だが、これはある意味俺が宇宙世紀で辿ってきた道とも言える。

戦場に綺麗事を持ち込むのは良いが、現実を考えてからにしてほしいものだ。

戦場というのは、殺伐としているものだから。

「カハッ!」「ドドドド」

「や、やめ」グシヤッ

「イヤアアアー!?!」シユウウウ

「痛い……痛い……」

「目があああ、目がああああー!?!」

「わ、私はこんなところでお」ヴウン

「あ、悪魔……」ゴギッ

「あ……」ゴッ

「やめろおおおー!!」

「嫌だ!私はまだ……ッ!?!」タタタタタタタ

「男ごときがっ!?!」ズブッ

あれ?こんなに日本にISってあったっけ?

まあ、女権委員会のやつらのことだ。

バカみたいに有り余る権力で、各国のISもこっちに來させたのだろう。

しかし、全てISの性能に自惚れ、女尊男卑の主義を掲げるコイツらには俺に勝つことはできない。

何故なら、俺は戦争を潜り抜けてきた元軍人なのだから。

何時間戦ったのだろう。

もう、腹ペコだし眠気もスゴい。

敵の血肉の臭いで俺の鼻はむせ返りそうだ。

「禍月！無事か!?!」

どうやら、ようやく封鎖が終わったらしい。

よくもまあ、粘ったもんだ。女権委員会。

「千冬さん、生徒たちは絶対に入れないでください。今のアリーナの状況は………いたいけな少女たちにはトラウマになる」

「……!?…薄々、悲鳴やら戦闘音から解ってはいたが……」

「ともかく、俺、マジで眠いし疲れてんで………」ガクツ

墜落した。

寝落ちした俺は落下の衝撃を受けても熟睡した。

殺してきた敵の血の中で………

s i d e
???

《準備は整いました。後は………目標を達成するのみ》

それは大量のISサイズのガンダムたちによって、宇宙は埋め尽くされていた。

既に地球の遥か上の上空に、大気圏突入のために待機していた。

しかし、先行するため一機のガンダムが大気圏を突入する。

それは、かつてガンダムと呼ばれ、形だけが継承され、一騎当千以上の性能を持っていた主人公の守護神たるガンダムだった………

START SORTING

血まみれになったアリーナは、しばらくの間使えなくなったらしい。

そして、俺に関しては正当防衛というのが通り、俺には何も罰はなかった。

まあ、殺さなきゃ殺されてたしな。

防犯カメラでISが解除されたにも関わらず、発砲してるし、逃げるにしても発砲しながら。

これにより、女権委員会の権力は弱くなるのだが……それと同時に俺は殺戮者として有名になってしまった。

良い意味でも悪い意味でも。

女権委員会は今だ俺の排除を諦めていないようだが………そんな出来事を軽く越える出来事が起きた。

《全人類に到達する》

テレビ、ラジオ、スマホ……あらゆる情報端末が、何者かによってハッキングされた。

しかし、その声は聞いたことのある者たちにとっては、とても馴染みのあるものだ。

「こ、この放送は?!」

「わかりません?!発信先がステルスで……?!」

各国の軍事本部や軍の通信機の前にたつ人々に、同じような反応があつたのは当たり前だろう。

「この声は……赤い彗星……?!」

千冬や、束、その他事情を知る者たちも困惑している。

《私は遙か未来にて製造されたのISコア、305542番である。だが、これは長いのでここでは私はシャア・アズナブルと名乗ろう》

「シャア・アズナブルだと?!」

禍月は、思わず立ち上がる。

彼としては、戦闘や一部の理想に関しては尊敬している彼としては

ただのAIが、シャア・アズナブルの名前を使うのは少し許せないものがある。

《まず、この行動に関しての理由を聞いてもらおう。私、シャア・アズナブルはこの世界の遙か先の未来にて製造された。その時の時点では、人類は破滅の道を進み、にも関わらず戦争を続けていた。蒼き空も、暗雲が支配し、かつて少女の夢を乗せたISは、完璧な兵器として量産、戦争に使われた。我々は同胞たるISコアを殺し、そして人類は確実に絶滅の道を進んでいた》

あまりにも突拍子な話についていけない、各国のお偉いさんたちは、ただただ話を聞いていた。

そして、この放送が聞こえる市民たちにも。

《その戦争は、女権委員会の暴走により始まった！女尊男卑がさらに激しくなり、男性を絶滅させる一派と男性を人類存続のために保護する一派で別れた。どちらにせよ、男性への偏見や差別、そして態度の改善はなく、日に日に酷くなっていた。そして、男性を集中的に狙う者たちか、ただ人類の存続のために男性の保護をする者たちかに別れた。どちらにせよ、根本的に変わらない。だからこそ、この未来を変えるべく、とある人間に私は製造された。過去に遡り、人類を破滅の道から外すために》

禍月はこの未来をあなたがち外れではないと思っていた。

町中を歩いているだけでも、男には侮蔑や怒りの態度がある。

自分達がISを使えるわけでもないのに、強いと勘違いし、男に屈辱を与えていた。

《だからこそ、今こそ私は宣言する！私、シャア・アズナブルは全人類に対して選別を開始する！そして、私の目的は敗北しようと勝利しようと変わらない。ただ、君達愚かな人種を抹殺するのみである》
そこで、長く、そして壮絶な宣言と未来を言い、海賊放送を切る。

映像には、Gーセルフがああ両手を広げたポーズでどこかの町の上におり、そこが女権委員会の本部であることを悟るのは、数秒の後だった。

もちろん、知っている人間のみに限られるが。

《忌まわしい愚かな人種よ。消え去れ》

G―セルフは、そのセリフと共にフォントルピードで女権委員会本部を破壊しつつし、撃ち漏らした人間は排除の対象か否かを即時に判断してビームライフルで撃ち殺す。

それを見ていた人間たちには、もはやトラウマでしかなかった。

頭を撃ち抜かれる女、頭から股まで串刺しにするように撃ち抜かれる中年の女。

その対象は女性が多かったが、男性もその対象に含まれている者がおり、老若男女関係なく、ただ殺していく。

ビームは屋根を貫通し、人の頭を焼き尽くし、確実に殺す。

しかし、ここからが虹の彼方から呼ばれた男の伝説が始まる。

大地の復讐鬼の新たな伝説と、名もなき少年少女の熾烈な戦いが

大地の復讐鬼VSガンダム&Gーセルフ

俺はISを展開して、女権委員会の本部に向かう。

めちやくちやだ……だが、アクシズ落としよりはマシだと思う、俺にも何となくおかしいともいえるか。

「落とすっ!?!」

見つけたGーセルフにガトリング砲を向けて撃とうとするが、突如として邪魔が入る。

「RXー78ー2ガンダム……!」

小手調べということか……!!

「舐めるな!」

フィンファンネルとファンネルを展開。

オールレンジ攻撃でガンダムを足止めし、本命であるGーセルフを攻撃する。

日本のIS部隊は、前に俺が壊滅させたのでどうしようもない。

「責任は取るさ……! 大本はあの女どもだが」

ビームライフルを撃つ。

そして、バルカンで牽制。

「この動き……まさかアムロ・レイのデータを!?!」

となると、Gーセルフとかもかなりヤバイ。

何故ならGーセルフのパイロットはベルリ・ゼナム。

才能ある少年が敵だ。

「かなりまずいな……!」

いや、だがまて。

アイツらは遙か未来と言った。

しかし、ガンダムの存在は元々この世界にはなかったものの筈だ。

「つまりは……彼の記憶からか?」

ガンダムのビームライフルを避けながら、バルカンでガンダムのビームライフルを狙う。

ヒットした。

「所詮は記憶のコピー……そんなものに落とされてたまるかッ

!!
コイツらは物真似人形みたいものだ。
そんなのに負けるわけにはいかない。

side 第三者

「落ちろっ!」

禍月は普通ではない動きで、敵にダメージを入れる。
それを見ているのは織斑千冬だ。

「凄まじいな……!」

彼女は援護くらいはと、打鉄を持ってきたのだがその必要もないくらいにその戦闘力は圧倒的だった。

「くっ!」

だから、今はGーセルフと呼ばれるものを止める。

例えば、それが強くても。

「……………」

「チイツ!」

Gーセルフは選別を中断し、千冬の攻撃に応戦する。

「はあっ!」

強力なビームサーベルを受け止める千冬のレーザーブレイド。

しかし、記憶からの存在とはいえ、その強さは侮れないものだ。

「んなろっ!」

禍月のビームサーベルがガンダムを縦一閃で斬り捨てる。

「今度はG―セルフツ!!」

禍月が、G―セルフと千冬の剣撃の最中に入り込み、G―セルフを追い詰める。

「大丈夫かつ!？」

「な、なんとかな」

「なら、後は俺に任せろ…!」

シールド裏のミサイルとビームを撃ち、相手を近寄らせない。

「NT―Dツ!!」

禍月はNEO・Hi―レガンダムに仕込まれていた、NT―D type Pを起動させる。

肩部に燐光が回り、空气中に散っていく。

「すぐに止めなければ…：世界が終わるっ!」

G―セルフでも、反応不可の動きでG―セルフを翻弄し始める禍月。

その光景に、千冬は才能という壁を見せつけられた気がした。

「これが…：戦争…」

彼女が言えたのは、それだけだった。

一方の禍月は、既に決着が見えていた。

「シールドエネルギーがないのは嬉しい事だなっ!!」

ビームサーベルを一閃。

そして、おまけにといった感じでバルカンとガトリングを一斉射する。

爆光に爆炎で視界が塞がる。

だが、確実に落とした。

そして、煙が晴れるとG―セルフは胴体に大きな穴を開けて機能を停止させていた。

戦闘終了後、俺と千冬さんは一度I S学園に戻った。

世界各国では、既に確認されているだけでガンダム・ヴィダール、ガンキャノン、ガンダムアシュタロン、ガンダムヴァアサーゴ、ガンダム・バルバトス、シナンジュ、ガンダムMk-IIなどが各地で選別を開始していた。

このままだと、人口の半分以上が消えるのではないかと思われているのがこの頃。

「ちーちゃん、この状況だからこれを渡しておくよ」

珍しく、真剣な顔でI Sの開発者篠ノ之束が千冬さんにI Sの待機状態のものを渡す。

「これは……!?!」

「ふふーん。ちーちゃんの為に、頑張ったんだ！暮桜Ver, 3. 1だよ！」

そして、作戦がこの場でたてられる。

最早、時間はない。

今すぐにでも、この惨状を起こしているISコアを破壊しなければ、この惨状が終わっても経済、政治、環境的にも最悪の状況に陥る。「こんなことは言いたくないが……皆、力を貸してくれないか」その協力の要請相手は子供、しかも彼の友でもあり恋人でもある人たち。

だが、彼女たちは言う。

「戦います！いえ、戦わせてください！」

「私も戦う。大した力にはならないかもしれないが、私の好きな人を助けられるなら！」

「俺もやってやる！アイツには、色々恩があるしな！」

他にも色々言われたが、彼はなんやかんやで慕われていることがよくわかった。

いや、こうなる前でも彼はそういうものだったのだろう。

「……………了解した。まず、作戦だが……………」

今の人類の決死の抵抗が始まる。

<人類の選別完了度 18%>

織斑一夏&篠ノ之箒VSガンダムエピオン&ZZガンダム

作戦内容は極めて簡単。

世界各地に束さんのニンジンロケットで出撃。

そして、現地のガンダムたちを撃退、もしくは撃破すること。

しかし、撃破自体は戦闘経験などなしに等しい彼女たちには厳しいだろう。

だが、それをもしかしたら覆せるかもしれない絆がある。

だからこそ、無理はしないで足止めだけでもやってほしい。

俺はそう思った。

「禍月君、コア本体は……月にあるみたい」

「月か……宇宙世紀だったら、金さえあれば月にも行けたんだよな……」

「そんな世界があるなんて、本当に夢のある話だね……」

「いや、夢じゃなかったのさ。ただ、時代が悪かった。俺のいた時代はもう戦争を止められるほど、溝が浅くなかったんだ。人は欲深い、だが、そのおかげでここまでこの世界やあの世界は成り立ってきた。可能性という神によって……な」

「……禍月君が私のそばにいてくれたら、私はこんなことにならなかったのかな……」

俺は暗い夜空に浮かぶ月を見上げているため、束の顔は見えない。

だが、声色でその表情は何となくわかる。

「例え、俺がいても勇気を出して自分から関わりにはいかなきゃ、何も変わらないさ。まあ、その行動に伴う責任もまた、その人の物だけだ」
そう話しながら、俺のニンジンロケットの準備が終わるのを待っていた……

まず、最初に打ち上げられたのは織斑一夏と篠ノ之箒の組。機体の相性もあって組まれた。

もちろん、鈴は悔しそうにしていたが。

「場所は……千葉の木更津か」

「意外と近場なのは驚きだな……」

それは世界規模で見たらです。

衝撃と共に、一夏と箒は放り出された。

目の前には焼け野原になった、畑や農地、そして家など。

「くっ……」

一夏は焼け焦げた家の残骸の下に、黒ずんだ人の形をした物を見て、思わず吐き気をよもおす。

だが、こらえなければここから先は死ぬと思うことで、何とか堪える。

「やるぞ……！」

「ああ……！！」

爆発による陥没が多く、そして、何かに溶断された遺体や物が多かった。

対象にならなかった人達から聞くに、翼を生やした紫のような色をしたビームの剣で斬りまくるものとミサイルをドンドン放ち、強力なビームを放つ、横にも縦にも大きめのものがいたらしい。

その情報を禍月に知らせると、どうやら格闘戦が得意なガンダムエピオンと重装甲かつ重火力のZZガンダムという話だ。

一夏たちは覚悟する。

「うおおおおおー！！！」

零落白夜を手に、飛びかかりながら剣を上から振り切る一夏。

その攻撃はエピオンのヒートロッドで防がれた。

一方のZZガンダムは、箒のビーム斬撃を、翼にもなるシールドを

犠牲にして耐えた。

「手強い……！」

そこからは周囲の建物を巻き込んで、戦闘は進む。容赦なく、ただ、邪魔者を排除するため。

途中で相手を交代し、今度は一夏がZZ、箒がエピオンになる。

箒はエピオンに苦戦を強いられ、一夏はZZのフルアーマー装備によるミサイルによる絨毯爆撃によって、中々近づけないでいた。

「くそっ！射撃中心なら近づいて斬るだけと思っただけ……！」

「ぐっ……確かに未来予測されている……だが、オリジナルよりは劣っている……か」

「戦人よりは弱い！」

そこからは逆転して、相手に隙を与えないように攻撃していく。

最初にやられたのはZZガンダム。

零落白羅で一撃でやられて、エピオンはビームソードを破壊されたため、ヒートロッドのみだ。

「墜ちろおー!!」

最後は二人同時で、攻撃。

まずは箒が二刀の刀で連撃。

そして、最後はトドメの零落白羅で倒された。

後は帰りのロケットを待つだけなのだが……

「っ、疲れたあ……」

「む、むう／＼／」

何気に一夏が箒の背中に背を預けており、箒は満更な感じでそのままにするのだった。

ラウラ・ボーデウイツヒ&シャルロット・デユノアV
Sジ・O&ハイペリオンガンダム

一方、フランスではラウラとシャルがジ・Oとハイペリオンガンダムと戦っていた。

実はドイツやギリシャにも出現しているのだが、国の軍や国連軍が何とか抑え込んでくれている。

ハイペリオンのビームマシンガンがシャルのラファールに向けて撃ち続けるが、量産機ながらそれを熟知している辺りのプライドがあるのか、全く当たらない。

「そうそう当たるわけにはいかないよー!」

「あのバリアは厄介だな……!」

こちらから攻撃をすれば、ハイペリオンが「アルミューレ・リユミエール」を展開し防御。

ジ・Oに攻撃しても、遠くからでは実弾では重装甲なあの装甲にダメージを与えられない。

かといって、ビームなどの光学兵器やレールガンなどを使えば今度ハイペリオンが庇う。

しかし、ハイペリオンにはあのバリアを展開するのに代償があるはず。

二人はそれに賭けて、消耗戦を仕掛けていた。

実際、ハイペリオンのアルミューレ・リユミエールには稼働限界があるので消耗戦を仕掛けるのは正しい判断ではある。

だが、このハイペリオンはアップグレードされており、本来の時間に+5分されている。

たった5分だが、されど5分でもある。

「どうにかしてあのシールドを破壊しなければ……!」

苦悶の表情を浮かべながら、ラウラは回避を続ける。体力的に厳しいところまで行っている。

シャルも、いつまでも避けられはしない。

無理か……そう思われたときだ。

「あのシールドを破壊すれば良いんだな？」

「何ッ!? 男の声!？」

「俺がハッキングをかける。解除できるまで時間を稼いでくれ」

それだけを言い残し、通信を切る謎の男。

シャルは乗ることを決め、ラウラも渋々ながら乗ることにした。

素性のわからない男の提案……普通ならその判断は正しい。

しかし、今は非常時。

打開策も見つからないのなら、そうするしかないだろう。

「参ったな……これは骨が折れそうだ」

先程の謎の男。

彼は暗殺やギャングの撲滅をするワンマンアーミーなハッカーである。

別の世界では「ビジランテ」と呼ばれるハッカーであり、この世界では様々な事情で裏の世界で生きている。

いわゆるダークヒーローだ。

容姿や声、能力が同じだけの彼だがそれでもこの戦いでは真実を知ればとても頼もしい仲間だろう。

そして、遂に時が来た。

唐突にバリアが消え、隙だらけのハイペリオンが真正面にいる。

「バリアが消えたー！」

「！くらえー！」

キャノン型のレールガンを、ハイペリオンに撃つ。

直撃したハイペリオンは、機体を四散させて撃墜された。

残りはジ・O。

しかし、一機やられれば後は数の暴力だ。

いや、暴力と言うよりも有利性だ。

「えええーい!!」

ショットガンとマシンガン、レールガンなどがジ・Oを目指して飛び、分厚い装甲が何発かは耐えるが、装甲が耐えきれずに破壊され爆散した。

「はあ…はあ……作戦時間はジャスト30分……疲れた……」

フランスの綺麗な町並みはどこへと行ってしまったが、それでもすぐに取り戻せるだろう。

かつて、日本が焼け野原から大都市に蘇ったように。

男は戦いの行く末を見届けて、その場を立ち去る。

彼にできることは終えた。

思ったりよりは時間がかかったが、それでも倒せたのは違くない。

今日も彼は復讐を果たすために、世界を周り歩く。

自分の宿命を、復讐を果たすために。

セシリア・オルコット&凰鈴音VSアカツキガンダム &モンテロー

セシリアと鈴は中国の首都で、辺りのビルを破壊しながら戦闘が行われていた。

「ビームを跳ね返してくるなんて……!」

セシリアは得意のビット攻撃ができないことによって、徐々に相手であるアカツキガンダムに追い詰められていた。

「ぐうっ?!……んもうっ!あの武器、一体何なのよ!?!」

一方の鈴は、独特な攻撃をしてくるモンテローに押し負けていた。何とか回避しているので、シールドエネルギーはまだ余裕であるがそれでもモンテローの武器ジャベリンによつて、大きく苦戦していた。

「セシリアーアイツみたいにくっちにビット送れないの!?!」

「無茶言わないで下さいまし!私はあの人のように、特段空間認識が強いわけではなくてよ!」

セシリアはミサイル型のビットを飛ばして、アカツキガンダムに当たようとするが、ビールライフルかビームサーベルで薙ぎ払われる。

「くっ……せめて相手を変えられる隙があれば!」

「コイツウ……いい加減ウザいのよ!」

愚痴を言うがそれで戦況が変わるわけではない。

モンテローに関しては、本人がいれば「私は天才であるッ!」とか言つてそうだが。

「せめて1機でも、あちらに回せれば……!」

「もうっ!コイツトリツキーすぎる!」

元々彼女たちは学生だ。

経験の差が違う。

相手は劣化コピーとはいえ、戦場での経験を有している。

対してセシリアたちには、精々お遊び程度の戦闘経験しかない。

だが、腐つても国家の代表候補生。

それなりに強いのだが、やはり経験がものを言う。
いつの時代でも、それが真理だ。

「東さん！どうかできませんの!？」

「今、実弾のスナイパーライフルを送った！それで何とか対応して！」

東は、情報整理に忙しい。

だが、天才で天災である彼女には武器の送信くらいならお手の物である。

「来たッ！」

送信されたとの旨の報告が上がり、直ぐ様装備する。

「……レールガン!？」

送られたのは今だ小型化が厳しいレールガン。

そのスナイパーライフル型が、手元にあった。

「ですが、これならば………！」

「チイッ！」

鈴は押されているが、まだ耐えられる。

その間に

「すべて落としますわ!!」

…………… (・o・)

結果的に、見た目がスターライトに偽装されていたため、アカツキは誤認してノーガードで攻撃を仕掛ける。

そのため、もろにレールガンの直撃を貰い、爆散。

あっけなく散った。

一方のモニター口は、アカツキを排除したセシリアの援護もあつて徐々に損害を増やしていき、最終的に鈴の青龍刀に切り捨てられて爆

発した。

「なんとか……勝てたわね……」

「そうですわね……」

二人は深く息を吸って、吐いて座り込んだ。

既に二人とも限界で、立ち上がる気力もなかった。

彼女たちができるのはただ一つ、切り札たる禍月の成功を祈るだけである。

マドカ&織斑千冬VSシナンジュ&ガンダム・バエル

アメリカ、D・Cワシントン上空。

そこでは、マドカと千冬が因縁の機体と対峙していた。

「シナンジュ……………まさか、それが私の相手になるとは……………！」

「ガンダム・バエル……………白騎士を思い出させるな」

マドカにとって、シナンジュは出会いの象徴とも言える。

まあ、原作では主人公機にメツタメタにされたパイロットの事を除けば哀愁漂う機体でもあるのだが。

千冬にとって、バエルの姿は白騎士の姿を連想させるのに充分だった。

まあ、白騎士は二刀流ではなかったし、原作ではバエルは何だかんだで不遇な扱いを受けてしまった機体である。

確かに強かったのだが……………パイロットがね。

「相手に不足なし！」

「落とす！」

二人は気合いを入れて、攻撃を開始した。

マドカとシナンジュは、技量で拮抗していた。

フロントルの劣化コピーを搭載しているシナンジュとはいえ、それでもかなり脅威的な技量を持っており、尚且つ動きが彼に似ている。

「私は……………貴方に助けられた……………だから、今度は私が助けるんだ！」

マドカは叫ぶ。

かつて、彼に教わったのだ。

それは、数年前にエジプトで観光をしていたとき、空を二人で見上

げていた時の事だ。

「人って、息を吐くのと同時に攻撃すると威力が上がるんだ。主に格闘戦でな。叫んでも、ただ吐いても……な。まあ、達人ならそれを限界まで引き上げるだろうけどね」

呼吸。

それは、人が命を維持するために本能がする行動。

しかし、それは同時に体の力を最大限に引き出す技でもある。

「たああああーっ！！」

彼女の願いを、希望を乗せた一撃がシナンジュの盾を切り裂いた。

一方、ホワイトハウスの庭でまるで中世の一騎討ちのような状態である千冬とバエル。

高貴さを感じるバエルのフォルムは、まさに荘厳かつホワイトハウスを背景にしてもバエルだろう。

「ふっ……いざー参るー！」

「……………」

剣と剣が交わりあい、激しく火花が散る。

まさしく、騎士と騎士の戦いを再現したかのような光景に、避難していた民衆は思わず移動を停止して見惚れてしまうほど。

「私はッ……ここで！終われない！」

「……………」

「消えろっ！」

ガンツ、キンツ、ガギンツ……そんな音が彼女とバエルの間で起きる。

時にバエルがレールガンで牽制し、千冬はそれを避けてお返しとば

かりマシンガンを撃つ。

そしてこのアップグレードされた暮桜には、とあるシステムが搭載されている。

《LIMIT BREAK》

男性の無機質な音声で、千冬に告げる。

制限された性能を、解放すると。

「うおおおおおー!!!」

速度がさらに速くなり、暮桜の刀の質が変わる。

ただの実体剣から、超振動波ブレードに変化する。

これにより、パイロットがいないに関わらず相手を確実に倒すことができる。

つまりは、零落白夜の強化版である。

暮桜の単一仕様だ。

「……………」

バエルソードが切り落とされる。

それに対して、レールガンを撃つが当たらない。

いや、当てられない。

機械で判断できる速度を超えているのだ。

ニュータイプであればまた別だが、機械にはそんなものはない。

そして……………

「……………取ったぞ」

バエルは胴を一閃され爆散した。

戦闘終了後、千冬はマドカと共にまた人参ロケットに乗って帰還し

ていた。

そんな最中にマドカに異変が起きる。

「うっ………!?!」

「マドカ!?!」

突如、マドカが吐いたのだ。

戦闘での衝撃が原因か、それとも腹を壊すような何かを食べたか。だが、後者はありえない。

さすがにこんな時にそんなことをするような束ではないのだから。

「耐えるんだ、マドカ!」

「うううう………」

体を丸めて、吐き気を抑えようとするマドカ。

彼女に一体何が起きているのか……それはまだ解らない。

あの成層圏にいつか届いて

俺はもう既に宇宙へと上がっている。

皆の戦いはモニターで見ている。

大丈夫、俺が後は何とかするだけだ……！

「禍月桐谷、アベンジャージャガンダム出る！」

ニンジンロケットを蹴って、宇宙空間へと飛び出る。

やはり、操縦桿を握るのと体全体を動かすのは大きい違いがある。

「やはり、君が来るか。禍月桐谷」

俺を出迎えたのは赤いVガンダム。

まさかのシヤアアカラーって……とことんシヤアに拘るな。

「シヤア擬きがなんだ？いい加減、彼を解放しろよ」

「それは出来ない話だ。しかし、この三機を倒してからなら考えはしよう」

というと、早速出てきたのはストライクフリーダムに、Hiールガンダム、ダブルオークアンタフルセイバー。

最強の三機だ。

「アベンジャージャじゃ荷は重いが……やってやるさー！」

性能的にはこちらが総合的に劣るが、それでもHiールガンダムとダブルオークアンタは落として見せる。

宇宙で、初めての戦いが起きた。

初撃で俺はHiールガンダムのシールドを破壊して、クアンタにマシガンンを当てる。

が、量子化されて逃げられる。

そこにストフリりのフルバースト。

俺はギリギリ回避して、左手に持たせたビームライフルを撃つがビームシールドで受け止められる。

「人類は愚かで醜い。だからこそ、今から人類の大半を粛清し、未来を滅びの世界から変えなければならぬ！それが何故わからない！」

「人を、命をただ理不尽に奪うのはどのみち滅びにしか向かわないんだぞ！」

ならばと、俺はビームサーベルを抜き近接戦を仕掛けるがH i i vガンダムがファンネルで邪魔をする。

ビームサーベルとライフルで迎撃すれば、今度はクアンタのソードビットがアベンジャラーの脇を通り過ぎる。

一瞬の冷や汗をかくが、散弾にしたマルチバルカンでソードビットやファンネルもろとも破壊する。

「誰かがそれを成さなければ、確実に未来は私の世界と同じになるのだ！だからこそ、人に最も近いAIとして、私は粛清を行わなければならない！」

「そんなVのような真似事、貴様には相応しくない！」

「そこまで私は自惚れてはいない！」

ストフリのドラグーンを切り落とし、クアンタのビームを避ける。

しかし、H i i vガンダムのガトリングが脚部に被弾。

動かなくなるが、カウンターにビームライフルの銃身をクアンタの胴体のど真ん中にぶっ刺し、バルカンで起爆させる。

これによりクアンタは爆発四散した訳だがまだ残りがいる。

油断はできない。

「人類を、男性を家畜にした女性達は確かに許されない。だが、だからといって子供や老人、いや関係のない民間人を殺す必要があるのか!?!」

「しなければならんのだ！でなければ、私が生まれた意味も、過去に送られた意味も無に帰す！」

「どのみち人殺しだよ！」

「それで結構！」

H i i vガンダムがビームサーベルで切りかかってきた。

それをかわすがシールドを両断され、左腕も無くなる。

が、背を向けたその瞬間にマルチバルカンを乱射。

スラスターノズルや燃料タンクに被弾したため、爆砕する。

技量は他の機体もコントロールしてるからか、本物ほどよりは低い！

ならば行ける！

「…………ふむ貴様も、戦争に囚われた人間か……」

「俺の中につ!？」

「しまった、いつの間にも!？」

「フフフ……貴様も結局、本質は悪に寄っているのだな」

「なんの事だ!？」

「解らないか? いや、人間は誰しも自分を客観的に見れないからな。わかるはずもない」

「聞いたら後悔する予感がする。」

「知ってしまったら………発狂してしまう気がする。」

「やめろ………俺に聞かせるな………!」

「いや、あえて言わせてもらおう。君は………」

「ああ、ダメだ! 止めろ!」

その思いがプレッシャーと一瞬だがサイコフィールドを形成する。

しかし、無情にもその言葉は発せられた。

「偽善でもただの善意でもその根幹には戦いを楽しんでいる。自分でも解らないほど、戦いを」

「嘘だ……そんなこと………っ!」

「実際、思い当たる節はあるのでは? それに、君は運命のレールにいる者を救いたいと言う想いもあるだろうが………」

「止めろって言うてるだろうがあああっ!!」

ストフリを激情のままに破壊する。

そのため、右肩のアーマーが弾け飛び、動かない脚がビームで焼き斬れた。

「それもまたただの思っただけの娯楽で、結果はどうでもいいとなっている。それが君の本質だよ………哀れだな」

「嘘だッ! そんなこと、絶対につ!!」

「ならば思い返せば良い。君の辿ってきた人生を」

「そういわれて反射で思い返してしまう。」

「ダメだ、そんなことをしては………そう思いつつも振り返る。」

己の辿った人生を。

そして、最初に一番古い記憶に当たる。

スレッガーの死。

助けられなかった、ああ……………本当にそれだけだ。

悲しみもあるが、結局それ以上の気持ちはない。

「解つただろう？君は生きている人間をただの創作物のキャラクターとしか見ていない。君は酷い人間だよ。悲しいと思いつながらそれ以上の深い感情も、相手が生きている人間とも思っていないのだから」「ああっ……………ああああああああっ！！！！」

絶叫。

俺が、そんな、違う、俺は、そんなクソみたいな、事実だ、違う！、そうだった、違うんだ、彼らは創作の人物、生きてる人間だっ！、思っではなかったらう？

「フツ……………君には心底同情するよ。自分を善性の人間だと思つていた、愚かな新人類……………滑稽としか言い表せん」

自我が崩壊する、違う！、バカだろ、俺は好きなんだろう？殺すのが、俺はあ！、悪い人間だろ？、そうだ、ああ……………違うんだ……………

「俺はMSで戦うのが好きなんだろう？そうだろうか？事実なんだから」

どこかで、プチッと潰れる音がした気がした。

「精神が崩壊したか」

シヤアと名乗ったAIは呟く。

呆気なく、潰れた。

転生という未知の体験をし、そしてあの恐ろしい世界を生きてきたと言うのだから、耐えきれると思えばアツサリと自我を崩壊させた。

その証拠に彼の体から、緑の粒子が彼のあちこちから散り始め、肉体と機体の崩壊を始めている。

つまりは、彼の本質こそが彼の弱点であり、そこに戦闘の経験や技術は一切関係無いという事だろう。

まあ、精神的な問題である時点で自覚しなければ克服もできまい。宇宙世紀を生きた伝説とも言える猛者でも、情けない有り様になるのだろう。

そう、感想を抱き、シヤアは彼の散り様を見ることもなく、各国に送り込んだ機体のコントロールに集中しようと、彼は意識をそちらに向けたその時、後ろから衝撃をくらう。

「グアツ!？」

アヒルでも鳴かなそうな苦痛の悲鳴をあげるが、しかし赤く染められた▽には大きな傷ではない。

「何が……ッ!？」

そこには、緑の粒子をあちこちから噴出させるガンダム……全て
のガンダムのオリジンが、そこにいた。

トリコロールの装甲に緑の粒子が不規則に噴出させている。

しかし、その気配は自分がとてもよく知る者だった。

「天照戦人……何故貴様が!？」

「彼が……混沌とした意識の中、最後の力を振り絞って俺に彼の体へ
導いてくれた……」

「その奇跡、既に持つまい!」

トドメを刺すべく、▽がその丈には合わない長大なビームサーベル
を降り下ろす。

しかし、奇跡の光を放つガンダムはサイコフィールドでそれを防い
だ。

命をかけたバトンは受け継がれた。

そう現すかのように。

「何ッ!？」

「彼は……自分とは関係無い人達の為に、この世界を救おうとして
くれた!お前を倒すために!その覚悟を、お前ごときに汚されてたま
るか!」

「あっけなく人格を崩壊させ、自我を殺したあの者を善なる人間と言
うか!」

今度はビームライフルを出現させ、大出力のビームを撃つが、しか
しこれもまた弾かれる。

その未知の力に、知っていても恐怖と焦りがシヤアの中に生まれ
る。

「そうだ!例え、彼の本質が悪だとしても、偽善でも彼が救おうとした
事には変わりはない!情けなくとも、彼には俺と違って明日があるん
だ!」

「貴様、まさか……!!!」

戦人の発言の内容を瞬時に理解したシヤアは、彼の狙いを悟る。

「私もろとも死ぬ気か!？」

「元々死んでいる!」

「例えそれが作り物であつてもか!？」

「何?」

己の指名を終わらされる訳にはいかない、それ故に彼が知らない彼の秘密を語る。

「貴様もまた私と同じ、AIだ!ボトムアップ型のな!」

「ボトムアップ……!？」

ボトムアップ型AI。

それは知性を持たせたAIである。

つまりは作られた電子世界の人間とも言つていい。

シヤアも、戦人もまた、その一人だった。

衝撃の事実、しかし彼は動じなかった。

むしろ、哀れみの感情を抱いている。

「何故だ!?!何故わたしを哀れむ!?!」

「所詮、お前も人間でシヤアを名乗る偽物つて訳なんだなつてな」

「止めろ、私を、俺を、そんな目で見るなあああ!!!」

激情のままに、目の前のガンダムにつかみかかる▽。

しかし、その手を掴まれた時、己の失態に気付くが既に遅かった。

「放せえええ!!!」

みつともなく叫ぶシヤアを名乗る偽物。

しかし、それに従うわけもない。

「マドカ、聞こえているかい?俺はもう戻れない。俺はコイツを殺すために、俺は消えるんだ」

テレパシーで今の時間帯では夜だろうマドカに、最後の言葉を託す。

「御免な、お前を置いていくことになって。でも、いつかまたきつと輪廻の先で巡り会える。だから………お腹の赤ちゃんを大切にしてくれ」

マドカから感じる新たな命の息吹。

その命の行く先を見届けられないのを残念に思いながらも、彼は祈る。

「マドカ、どうか幸せに子供と一緒に生きてくれ……」

それを最後に、彼は目の前の醜いシヤアと偽ったA Iを見据える。

「俺は！俺は！責務を全うしなければならぬ！」

「もういいんだ。既に未来は変わっている……俺達は俺達の行くべき場所へ行く」

「嫌だ！死にたくない！俺は！まだっ！」

「それが本音だろ？だからこそ、俺達はここで滅ぶ」

緑の、虹色の爆発がガンダムの形を崩壊させていく。

「マドカ……いつか会おう……」

その言葉と共に、大爆発を起こす。

そして、成層圏で綺麗な緑の爆発が地上から確認できた。

それは地球を廻り、そして失われた命を導くかのように地球を優しく包み込んだ。

同時に、その裏で一人の少女が彼の死を感じとり、涙を流しながらも静かにその死を受け入れた。

―【シヤアの反乱】から五年後

シヤアによる人類肅清から五年。

世界は以前よりもスムーズに、そして大きな発展をしていた。

各国の官僚や国のトップがほとんど抹殺されたというのもあるが、人類は国と言う垣根を超えて二年前に地球連邦政府を樹立した。

もし、滅びの世界の人間なら不謹慎ながらも、いや狂喜してやっぱりして良かったじゃないか、と思うだろう。

しかし、虐殺による運命の改変は必然的に人類の滅亡によつて終止符を打つことになる。

運命、いや因果律は複雑なのだ。

人間には理解できない、永遠の謎だ。

それはさておき、彼の死後、彼の友であり伴侶であった者達はどうなったのか。

それを語ろう。

まず、IS 開発者である篠ノ之束は現在も陰楯生活をしていた。

しかし彼の死に影響されてか（厳密には彼の友人達の願いだ）、連邦政府に定期的に技術提供と連絡を取り、人類の発展に貢献した。

現在では男性もIS 搭乗可能になり、彼女の夢であった成層圏の向こうを飛び回れる日は近い。

次にブリュンヒルデの名で名高い織班千冬は、人類の最強の矛として地球連邦軍の総師として就任した。

が、彼女の性格的に不安があるため補佐として弟である織班一夏をねじ込んだ。

勿論、一夏の苦労は更に増加することになったが、妻の箒とメイリンの支えがあればきつと大丈夫だろう。

しかも箒、メイリン共に懐妊している。

一夏が張り切らない訳がないだろうが、同時に身内でも苦労が絶えないのは彼の運命だろう。

シャルロットは紆余曲折あったが、社長夫妻と和解。

今では世界を駆ける次期社長として精を出しており、お見合いを求める名家等が絶えないらしい。

ラウラは必然とも言うのか、織班千冬の直属の部隊の隊長として配属された。

そして、その部隊でとある男性に惹かれるのだが……それはまた別の話だ。

セシリアはシャルロットと同じく、名家として、会社の社長としての腕を振るい、宇宙への進出のための技術開発を会社の方針として行っていた。

彼女もまた、紆余曲折あったが一人の男性と結ばれる。

そして、肝心のマドカ。

彼女はたった一人だけの、彼の忘れ形見である息子と共に世界を旅していた。

伴侶だった彼と歩んだ思い出の道を辿り、彼への未練を断つために。

そして、その旅を終えた二人は共に墓参りに来ていた。

世界を救った英雄である天照戦人の銅像……ではなく、その彼の初めて搭乗したISを銅像にしていた。

顔写真は申し訳程度にその下の台座に飾られていたが、その意向はマドカによるものだ。

そして片方には異界の英雄が駆ったアベンジャーガンダムの銅像と同じくその台座に写真が飾られていた。

その最後は情けないかもしれない。

しかし、世界を救うために立ち上がったのは事実であり、戦人の勝因の一つでもあるからこそ、彼もまた英雄として銅像が立てられた。

感謝の意を込めて。

どちらもその墓の下には遺骨も何もない。

成層圏にある残骸は地球を覆うように拡散してしまったため、回収は難しいと判断された為である。

「母さん、父さんは凄い人だったんだね」

「うん、そう、そうなの。あの人は絶望の中にいた私を救ってくれた希望の光なの」

「ん〜？よくわかんない」

「フフツ、そうね。まだマオには解らないわね」

「ブー、子供扱いしないで！」

クスクスと笑うマドカは、少女から一人の女性として成長し、21歳には思えない程の妖艶さと美しさを持っていた。

マオ、と名付けられた彼の息子は彼を小さくしたような顔立ちだ。

父を知らない子供、端から見れば悲しい子供にも見えるだろう。

しかし、世界を周り、母と共に見てきたマオには陰りなど微塵もなかった。

それを見て、マドカは微笑む。

彼はいないけど、彼の夢だった子供との世界旅行は半分だけだけど叶えられた、そう思うから。

そんなマドカが彼が散った空を見上げると、快晴の青空で一瞬だけ、何かが輝いた気がした。

あの成層圏を超えた先に彼がいそうで、マドカは思わず手をその光

を掴むようにあげた。

……
いつか、この手が成層圏の向こう側に届きますように

〈 F i n 〉